松任市横江A遺跡発掘調査報告書

1984

石川県立埋蔵文化財センター

松任市横江Ａ遺跡発掘調査報告書

１９８４

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は石川県松任市横江町に所在する横江A遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は石川県農林水産部耕地建設課施行の一般農道整備事業（番匠地区）に係るもので、同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。発掘調査に係る費用は同課が負担した。

3　発掘調査は昭和57年度と同58年度の２次にわたって実施した。期間および面積は次のとおりである。

第１次調査　昭和57年11月１日～同年12月22日　面積500m²

第２次調査　昭和58年４月20日～同年５月27日　面積400m²

4　発掘調査は次の職員が担当した。

第１次調査　埋蔵文化財センター主事浜野伸雄、臨時任用講師藤田邦雄

第２次調査　埋蔵文化財センター主事戸澗幹夫、同三浦純夫

5　発掘調査にあたっては横江町有志（別掲）の協力を得た。また、第１次調査には杉野洋一郎（仏教大学学生）広多清一（関西学院大学学生）倉　直志の各氏、第２次調査には栃木英道、山津康義、山森浩幸、渡辺　功（以上金沢大学学生）石浦めぐみ（石川考古学研究会会員）倉直志、池田賢司の各氏の補助をそれぞれうけた。

6　本調査にかかる作業分担は次のとおりである。

土器復元……栃木英道・山森浩幸・渡辺　功

遺物実測……栃木英道・山津康義

遺物製図……藤田邦雄・山津康義

遺構製図……戸澗幹夫・浜野伸雄

遺構写真……戸澗幹夫・浜野伸雄・藤田邦雄

遺物写真……浜野伸雄・藤田邦雄

7　本書の執筆は調査担当者が次のように分担した。

Ⅰ……三浦純夫

Ⅱ……戸澗幹夫

Ⅲ……浜野伸雄

Ⅳ……戸澗幹夫・浜野伸雄・藤田邦雄

Ⅴ……浜野伸雄

8　本書中で指示した方位はすべて磁北であり、断面図の数値は絶対高である。

9　横江A遺跡の発掘調査によって得られた資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

例　言　　頁
I　調査の契機と経過……1
II　位置と環境
1　地理的環境……3
2　考古学的環境……7
III　調査の概要
1　調査区の設定……9
2　遺構密度と基本的層序……9
IV　遺構と遺物
1　第1号方形周溝状遺構……13
2　第2号方形周溝状遺構……14
3　溝……16
4　土坑……19
5　その他の遺構……21
6　包含層の遺物……23
V　まとめ
1　遺構について……28
2　遺物について……28
3　むすび……29

図 版 目 次

図版１　遺跡周辺の航空写真（昭和58年４月６日撮影）
図版２　第２区検出遺構
図版３　第７区・８区検出遺構
図版４　検出遺構と遺物出土状況
図版５　出土遺物(1)
図版６　出土遺物(2)
図版７　出土遺物(3)

挿 図 目 次

頁
第１図　横江町の位置……3
第２図　周辺の遺跡（1/25,000）……4
第３図　横江Ａ遺跡の範囲と調査区（1/5,000）……6
第４図　調査区区割図（1/800）……9
第５図　土層模式図……10
第６図　調査区東西壁面実測図（1/80）……折りこみ……11
第７図　２号溝出土土器実測図（1/3）……13
第８図　５号溝出土遺物実測図（1/3、1/1）……14
第９図　１区・２区・３区遺構配置図（1/80）……15
第10図　８号溝出土遺物実測図（1/3）……16
第11図　９号溝出土土器実測図（1/3）……17
第12図　７区・８区遺構配置図（1/80）……18
第13図　11号溝出土土器実測図（1/3）……19
第14図　10区・11区遺構配置図（1/80）……20
第15図　１号土坑出土遺物拓影（1/2）……21
第16図　４号土坑実測図……21
第17図　ピット１出土遺物実測図（1/2）……22
第18図　集石ピット実測図（1/20）……22
第19図　包含層出土土器実測図(1)（1/3）……24
第20図　包含層出土土器実測図(2)（1/3）……25
第21図　包含層出土石鋸・ガラス小玉実測図（1/1）……26

Ⅰ　調査の契機と経過

松任市の東端にある横江町は、北東部を金沢市に、南東部を石川郡野々市町に接し、石川県鉄工団地と横江工業団地を中核とした工業地区であるとともに、町の中央部を北流する郷西用水によって豊かな水田地帯をも形成している。

ここに、松任市施行事業として、昭和57年度に約90,000m² を対象として転作促進対策臨時県単ほ場整備が実施されることになった。事業実施箇所には周知の遺跡は存在しないが、近くに国指定史跡東大寺領横江庄遺跡が存在することから、施行主体の松任市土地改良区から依頼をうけて松任市教育委員会が中心となって、遺跡の分布調査を実施することになった。横江Ａ遺跡は県耕地建設課施行の一般農道整備事業（番匠地区）を原因とするものであるが、事業箇所が上記のほ場整備実施区域に挟まれて位置するため、市の分布調査によって結果をみることにしたのである。分布調査は松任市教育委員会社会教育課の係員が主体となり、昭和57年７月９日・10日と同月20日～22日の二回に分けて実施し、この間当センターの職員が随時立会って指導するという形をとった。

分布調査の結果、遺跡は広域農道から南側に約150m、東西方向に約130m の広がりをもつことが確認され、一般農道整備事業にかかる部分では発掘調査が必要であることが判明した。当センターではこの結果をふまえて県松任土地改良事務所と急遽協議を行ない、次の事項を確認した。①農道敷にかかる遺跡の広さは約1,000m² である。②埋蔵文化財センターでは、昭和57年度中に全域の調査を実施することは日程的に不可能である。したがって、57年度はさしあたって58年度の水田耕作に必要な側溝と暗きょ部分の調査にとどめる。この面積は約500m² である。③農道敷にかかる部分は昭和58年度に調査を実施する。

第１次調査は上記の確認事項をふまえて、昭和57年11月１日より開始した。調査にあたっては地元横江町の協力をうけた。調査中は雨にたたられることが多く、年内に終了するか否か懸念されたが、12月22日に終了できた。調査の結果、弥生時代後期の方形周溝状遺構をはじめ、溝状遺構、土坑等を検出した。なお、方形周溝状遺構の全容を確認するために暗きょの部分を南側に一部拡張した。

第２次調査は昭和58年４月20日より開始した。バックホーによる表土・耕土の除去が終了した段階で、調査区の北側がかなり攪乱、削平を被っていることが判明した。昨年度の調査で遺構が濃密であった箇所の隣接地（第３～５区）で、方形周溝状遺構近くでもあり重要な箇所であった。このため当センターでは県松任土地改良事務所の担当者と現地で事実を確認した結果、埋蔵文化財センター、土地改良事務所、工事請負業者の三者間では、第２次調査箇所の取り扱いについて確認がなされていたものの、業者のなかで重機の運転者に指示が徹底していなかったことが確認された。当センターでは土地改良事務所に対して、今後農林関係事業が松任土地改良事務所管内で増加していく傾向でもあり、一層連絡調整を密にして埋蔵文化財の保護にあたられるよう申し

入れた。調査は昨年度にひきつづき横江町の協力を得て実施し、昭和58年5月27日に終了した。面積は約400m² である。

調 査 協 力 者

第1次調査	大藪 次政	川西 次吉	北村 剛	北村 利一	木村 勝二
	清水 義一	清水 省三	清水 良一	竹本 清次	松田伊三男
	宮下 清作	横山 与作	松田美代子	山岸 郁子	
第2次調査	大藪 次政	北村 剛	北村 利一	清水 義一	清水 良一
	高野 太一	竹本 清次	中村 魁	宮下 清作	宮下 与真
	横山 与作	木村 文子	松田美代子	宮本 好枝	山岸 郁子

調 査 日 誌 抄

第1次調査

昭和57年11月1日(月)雨　発掘器材の運搬準備。午後より松任土地改良事務所と打ち合わせを行なう。

11月4日(木)晴のち曇　本日より現地調査開始。調査区設定の杭打ち作業を行なう。プレハブ設置。

11月6日(土)晴　本日より作業員が入り掘り始める。第2区～6区で側溝予定箇所の表土除去を開始。

11月12日(金)雨　雨天ではあるが晴れ間をみて東側2区の排水作業および遺構検出作業を行なう。

11月15日(月)晴のち曇　第2区～第5区の掘り下げ開始。第2区・3区西側で検出した溝を完掘し、実測、撮影、レベル記入を行なう。

11月22日(月)曇　第7区～10区までの掘り下げ。10区で検出した遺物の実測、写真撮影を行なう。

12月1日(水)晴　道路敷予定箇所を一部拡張し掘り進める。方形周溝状遺構の北辺の溝（7号溝）を検出。埋文センター職員6名来訪。

12月3日(金)晴　道路敷予定箇所で検出した8号溝を掘りおえる。埋文センター浜岡所長、橋本次長視察。

12月10日(金)曇　拡張区の清掃および写真撮影。溝状遺構の断面実測。西側断面作図のため壁面の整理。

12月14日(火)晴のち曇　東側断面の実測。側溝部分第10～11区の遺構断面図作成。第11～13区の平面図作成。

12月22日(水)晴のち曇　東側断面図の作成。本日をもって現地作業を終了し、器材を撤収する。

第2次調査

昭和58年4月18日(月)晴　現地で昨年度の担当者と調査対象区を確認し、プレハブ建設場所を決める。

4月25日(月)晴　本日よりバックホーにより耕土の除去開始。地山まで相当の攪乱を被っていることが判明。遺構は殆んど失なわれている模様。

4月28日(木)曇時々雨　耕土除去作業を続け、併行して杭打ち作業を行なう。午後、松任土地改良事務所の担当者と現場の攪乱状況を確認。

5月10日(火)晴　第3～5区の遺構を掘り下げ、実測・写真撮影を行なう。第7～8区の遺構検出。溝状遺構3条、集石ピット1基検出。

5月14日(土)晴　第10～11区の耕土除去。第8区の集石ピットを実測し写真撮影を行なう。第10～11区の東側で遺構を掘り下げる。

5月19日(木)晴　第11～13区の遺構掘り下げと遺構状況の写真撮影を行なう。遺構および旧地形変換線上の土層図を作成。

5月20日(金)晴　第10～13区の清掃および写真撮影。第7区で検出した第4号土坑の掘り下げおよび実測。

5月21日(土)晴　第10～13区の遺構平面図実測。第13区東側の断ち割り作業。同区の写真撮影。本日をもって第2次調査の発掘作業を終了する。

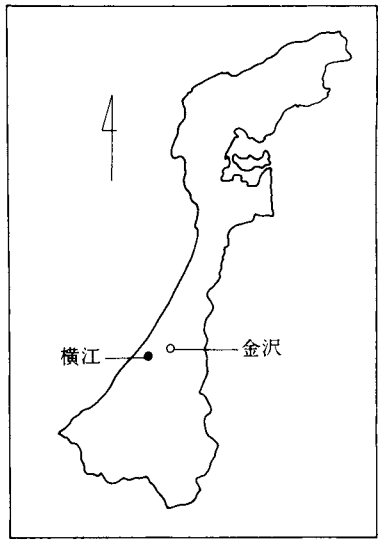
5月23日(月)晴　器材を整理しセンターに撤収する。

5月27日(金)晴　プレハブの撤収。本日で現地作業を終える。

II　位置と環境

1　地理的環境

横江A遺跡は、金沢市の南西方に近接する松任市横江町地内に所在する。白山を源とする県下最大の河川手取川によって形成された手取扇状地の北東端にあって、標高12m前後を測る石川平野の一画に位置する。東方には富樫山地を遠望でき、西方約4kmの海岸線には安原海岸砂丘があって扇端部を被覆している。東北には手取扇状地の境界をなすかのように伏見川が流れている。南方に広がる手取扇状地は、曲率半径12km、扇形の開角度110度を測り、等高線が扇頂を中心として同心円状を示す形態はわが国を代表する扇状地形といわれている。(註1) 手取川は古来より〝あばれ川〟の異名をとり、本流河道の変遷が激しかった。正和年間（1312年～1316年）の白山宮水引神人沙汰進分注文案（『三宮古記』）に、「河ヨリ南方、寺井・安宅・福増」とみえ、鎌倉時代末期頃は現在より北方にあったことを示している。したがって、扇央稜線（鶴来駅から松任市徳光を結ぶ線上）より南側の地域は、幾度となく流路を変えた氾濫の著しい地域であり、一方の本遺跡周辺を含む北側の地域は、南側に比して氾濫を受けることは少なかった。(註2) 原始・古代の遺跡が北側の地域に偏在する傾向にあるのも、そうした状況を考古学的に物語るものといえる。



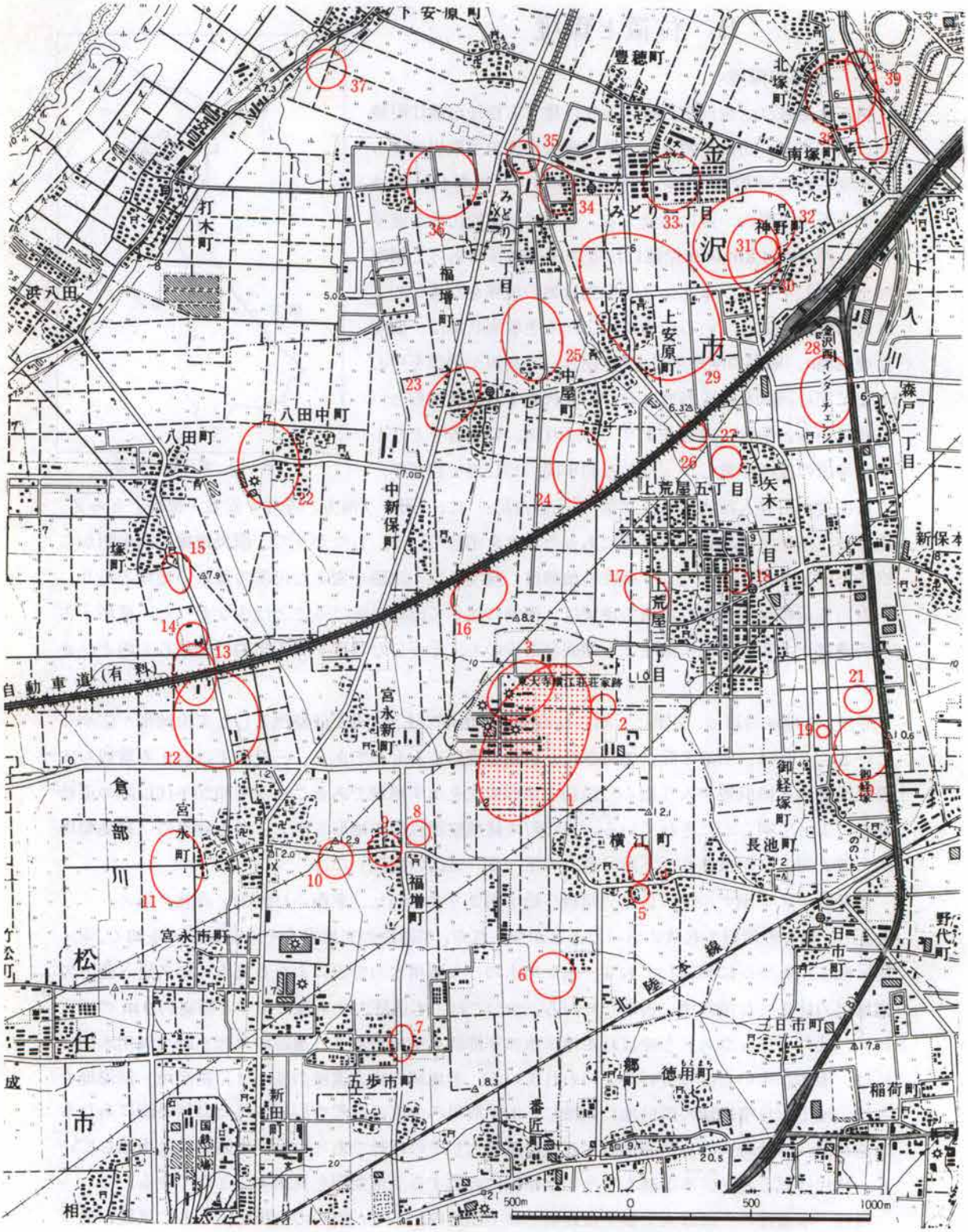
第1図　横江町の位置

さて、本地域周辺は、全国にも知られる早場米地帯であり、現在は整然とした美田地帯が広がっている。それは、明治年間に施行された耕地整理によるものであり、一見低平にみえる景観も実際は微高地・微低地が入り組んだ微細な地形変化を示す地域であることが昭和20年代以降の遺跡調査によって明らかにされている。(註3) 横江町の耕地整理以前の地形を伝える明治43年の「耕地整理組合設立届」に添付された「設計書」の第一章「地区の現況」には、(註4)

地勢概シテ平坦ナルモ、自然ノ傾斜ハ総テ南ヨリ北ニ向ヒ、東西ニハ軽少ノ波状ヲ呈ス

と記し、地形の傾斜と起伏のあったことが知られる。本遺跡の立地点もその記載にみる如く、北・南・西にゆるやかに傾斜しており、七ケ用水の一つ郷用水の分流にあたる東方の吉名川と西方の福増川の挟まれた微底地に占地している。かつては、本遺跡の北東端に接する標高約9mの地点には、通称「ショウズ」と呼ばれる地下水の季節的自噴地があり、遺跡の東西を画す両用水添いには、灌木が生いしげっていたといわれている。(註4) 本地域の縄文遺跡の多くは、微高地・低湿地をさけ、地下水自噴地域の微低地に立地し、旧手取川の分流の氾濫で形成された自然堤防にあたる微高地は、原始時代の食料を供給する経済基盤としての林野であったと高堀勝喜氏は指摘している。(註3) 時代は異なるが、本遺跡もそうした指摘に合致する立地要因を見出すことができる。

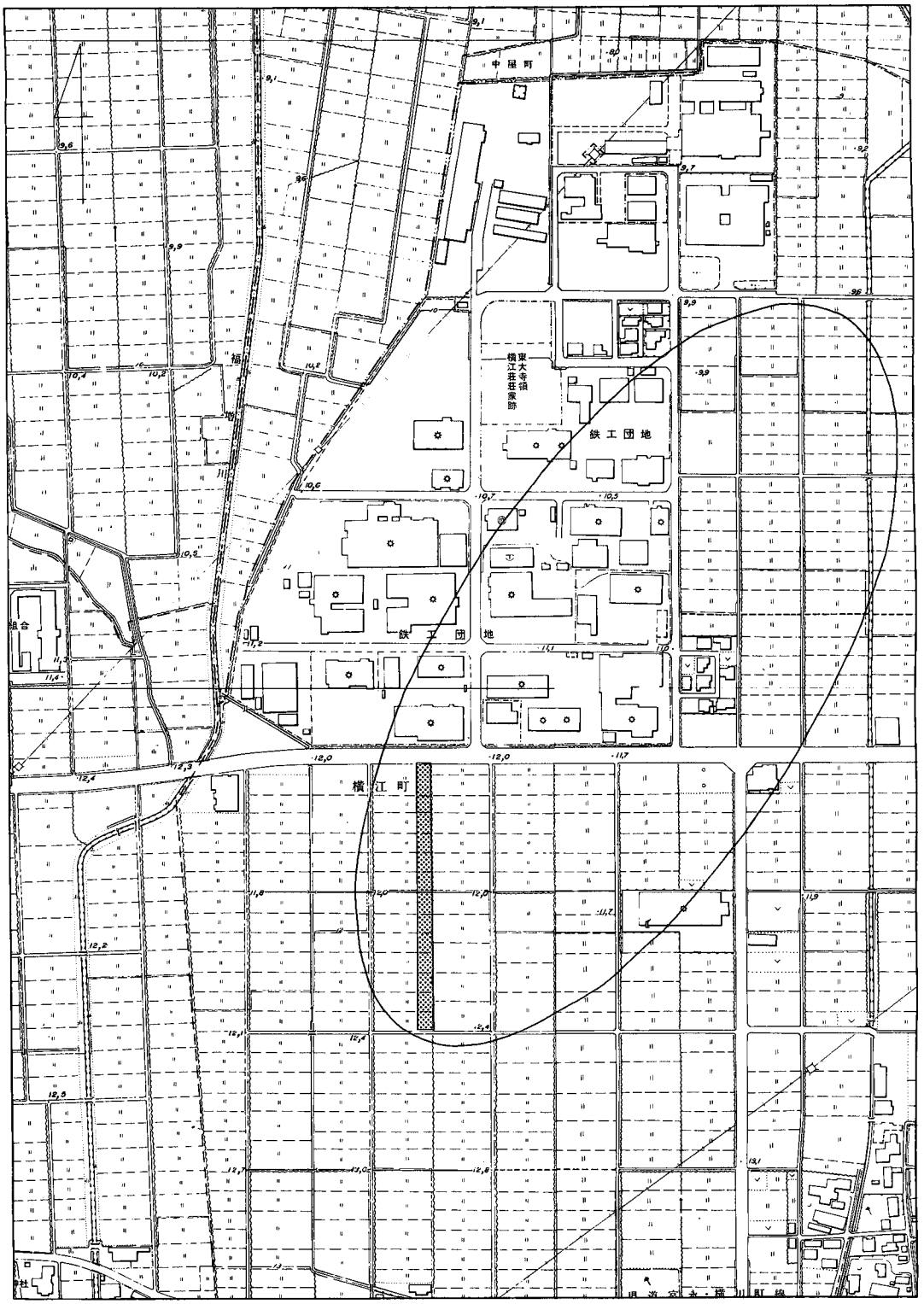
現在、本遺跡の一部は大型農免道路敷と鉄工団地内にあり、周辺の市街化とともに景観が変りつつあり、遺跡の破壊が懸念されるところである。



第２図　周辺の遺跡（国土地理院「松任」1/25,000）

第1表　周辺遺跡地名表

NO.	遺跡名	所在地	種別	時期	備考
1	**横江A遺跡**	**松任市横江町**	**包含地**	**縄文～中世**	
2	ジョウガンジ遺跡	〃　〃	〃	縄文	
3	横江庄遺跡	〃　〃	〃 住居跡	弥生・平安	昭和46年、同54年～56年に発掘調査。現在、史跡公園。
4	横江館跡	〃　〃	館跡	不詳	
5	横江B遺跡	〃　〃	包含地	平安	
6	ゴクラクジ遺跡	〃　〃	〃	縄文	
7	あさひ荘遺跡	〃　福増町	〃	奈良・平安	
8	福増遺跡	〃　〃	〃	縄文・弥生	
9	寝上市左エ門館跡	〃　〃	館跡	室町	
10	福増東川遺跡	〃　〃	包含地	弥生	
11	坊の森寺跡	〃　宮永町	寺院跡	室町	
12	宮永B遺跡	〃　〃	包含地	縄文・古墳・中世	
13	宮永遺跡	〃　〃	〃	古墳～中世	昭和44年、同58年に発掘調査。
14	旭小学校遺跡	〃　〃	〃	弥生・古墳	校舎建設により一部消滅。
15	一塚遺跡・一塚古墳	〃　一塚町	〃 古墳	縄文・古墳	
16	下福増遺跡	金沢市下福増町	包含地	縄文～古墳	
17	上荒屋遺跡	〃　上荒屋町	〃	縄文	
18	上荒屋住宅遺跡	〃　〃	〃	弥生	
19	御経塚経塚	野々市町御経塚町	経塚	不詳	
20	御経塚遺跡	〃　〃	集落跡	縄文	現在、史跡公園。
21	御経塚C遺跡	〃　〃	包含地	古墳	
22	八田中雁田川遺跡	松任市八田中町	〃	縄文	
23	福増遺跡	金沢市福増町	〃	不詳	
24	中屋遺跡	〃　中屋町	〃	縄文	
25	中屋ヘシタ遺跡	〃　〃	〃	奈良～中世	
26	上安原陸橋遺跡	〃　上安原町	〃	弥生	
27	矢木本町遺跡	〃　矢木本町	〃	縄文	
28	森戸バイパス遺跡	〃　森戸町	〃	古墳	
29	上安原遺跡	〃　上安原町	〃	奈良・平安	
30	南塚B遺跡	〃　南塚町	〃	古墳	
31	びわ塚古墳	〃　〃	古墳	〃	長経約15m、高さ1mの円墳。
32	南塚遺跡	〃　〃	包含地	縄文	
33	上安原緑団地遺跡	〃　上安原町	〃	弥生	
34	緑団地公園遺跡	〃　〃	〃	古墳	
35	緑団地下水処理場遺跡	〃　〃	〃	弥生	
36	安原工業団地遺跡	〃　福増町 〃　打木町	集落跡	平安	昭和50年発掘調査実施。
37	下安原遺跡	〃　下安原町	包含地	縄文	
38	北塚A遺跡	〃　北塚町	集落跡	〃	
39	北塚B遺跡	〃　〃	包含地	縄文・古墳～中世	



第３図　横江Ａ遺跡の範囲と調査区（Ｓ＝1/5,000）

2　考古学的環境

本遺跡の立地する手取扇状地の北東端地域は、県下でも有数の遺跡密集地帯といえ、先述した自然環境が古来より集落設営の好適地であったことを物語っている。

さて、当地域における考古学的な調査・研究は、昭和20年代頃から縄文遺跡を中心にして展開し、『押野村史』に代表される如く、北陸における縄文時代後期から晩期にかけての土器研究に大きく寄与するものであった。次に掲げる該期の標式遺跡が存在するのも、そうした研究史が背景となっている。

本遺跡の北東にある新保本町チカモリ遺跡[註5]は、後期後葉から晩期前半にかけての遺跡で、晩期初頭に位置付けられる「八日市新保式」の標式遺跡である。昭和55年の発掘調査で巨大木柱遺構が検出されて全国的にも話題となった遺跡である。西方にある御経塚遺跡[註6]は、数次にわたる発掘調査で径200mに及ぶ県下でも最大級の縄文集落跡であることが明らかとなり竪穴住居跡・土坑墓・配石遺構をはじめ豊富な出土遺物が報じられている。後期中葉から晩期後葉の長期にわたって営まれ、晩期前葉の「御経塚式」の標式遺跡である。現在、国指定史跡として公園となっている。北には、「御経塚式」に後続する「中屋式」の標式遺跡である中屋遺跡がある。これら三遺跡は2km圏内の至近距離にあって鼎立する中核的集落跡であり、本地域が採集経済下にあっては恵まれた条件下にあったことを暗示している。これら大集落跡に対し、規模の小さい遺跡も数多く点存している。横江町地内でも、本遺跡をはじめジョウガンジ遺跡やゴクラクジ遺跡から縄文土器や石斧・石鏃の出土を伝えている[註4]。その他、下福増遺跡[註7]（下野式期）、福増遺跡、宮永B遺跡、上荒屋遺跡などをみることができる。

次の弥生時代では、北東約2kmの犀川・十人川・伏見川などが縫合する湧水地帯付近に、上安原陸橋遺跡、同緑団地遺跡、緑団地下水処理場遺跡などの中期に遡る遺跡が知られており[註8]、半径1km圏内には、隣接する横江庄遺跡[註9]下層より中期の土坑が検出され、北0.7kmの下福増遺跡に小松式期の土器の出土がある。また、北東約1kmの上荒屋住宅遺跡からは抉入片刃石斧が出土しているが詳細は不明である。弥生時代中期の遺跡分布が多い犀川以北の低湿地に比べ、本地域の同期の遺跡は相対的に希薄といえる。しかしながら、弥生終末期から古墳時代前期に至ると飛躍的な増加をみることができる。西方約1.5kmにある旭小学校遺跡[註7]は弥生終末期から高畠式期の遺跡であり、それに隣接する宮永遺跡[註10]では月影式期の竪穴住居跡や配石遺構が確認されている。東方では、先述の御経塚遺跡や同B遺跡（ツカダ遺跡）・同C遺跡などが存在する。なかでも、御経塚B遺跡では[註11]、13棟にものぼる月影式期の竪穴住居跡や倉庫跡と想定される遺構が検出されて注目をあつめた。その他、竹松遺跡、宮永B遺跡、押野タチナカ遺跡などをあげることができる。こうした集落遺跡の増加は、鉄器の供給量の増加にともなう営農形態の変質にねざすものと考えられている[註12]。古墳時代後期の集落跡については、先述の御経塚B遺跡で確認されているが、調査例も少なくその実体は明らかでない。ただ、南西約3kmには、五世紀末葉と推定されている中相川1・2号墳[註7]がかつて存在したといわれ、また、北西約1.5kmの一塚地内に一塚古墳の名を残すが、いずれも現存していない。したがって、群集墳の継起的な発展の存否については不透明なま

までである。

律令時代では、扇端部だけでなく扇央部でも遺跡の存在が知られ、人工灌漑を前提とした可耕地の開発があったことを示している。それは、公権力を背景とした在地有力層の積極的な墾田の獲得があったからだと考えられている。[註7] 本遺跡の南東5kmにある扇央部北端に位置する末松廃寺は、その前史を物語る象徴的な存在といえる。

本遺跡に隣接する横江庄遺跡は、正倉院文書弘仁九年（818年）3月17日付けの酒人内親王の施入状に裏付けられる平城皇紀朝原内親王から東大寺に献上されたことによって成立した初期庄園遺跡としてあまりにも著名である。昭和45年の発掘調査では、[註9] 五間に二間の母屋を中心にして、内庭を「コ」の字形に囲む4棟以上の掘立柱建物跡群が検出され、庄所の実像を考古学的に明らかにした。出土品には、奈良時代末期から平安時代初期にかけての豊富な土器に加えて、「三宅」、「内」、「万」、「継」などの墨書土器や陶硯、下駄、木櫛などがある。庄所跡に東接する横江ジョウガンジ遺跡は、[註9] 庄所と時期的に併存しており両者が密接な関係を保持しつつ推移した遺跡と考えられている。また、横江集落の南には平安期と推定されている横江B遺跡[註9]があり、庄家とその周辺の村落景観を復元するうえで注目される存在である。これらのほか、本遺跡の周辺には、あさひ荘遺跡、中屋ヘシタ遺跡、上安原陸橋遺跡などの律令期の遺跡が知られている。

中世以降と考えられている遺跡には、横江町集落の北に横江館跡がある。その周辺の古地名には、タチ・東堀・西堀・矢閉・飼馬などがあり、林氏第四代の林六郎光明が五男の横江七郎基光以来の横江氏の旧跡ではないかと『横江史』は伝えている。[註4] このほか、東の御経塚町の地名の由来となったと伝承される経塚が東約1kmの地点にあり、南西0.7kmには室町期に推定されている寝上市左エ門館跡がある。

なお、『石川県遺跡地図』（昭和57年改訂・石川県教育委員会発行）によると、本遺跡調査地点は横江アズキダ遺跡（県No. 6500）となるが、本調査の結果や分布調査で横江A遺跡と同一の広がりにあることを確認したので、本書では横江A遺跡として扱ったことを断っておく。

註

(1) 藤則雄「自然環境」（『松任市史』現代編上巻　1981年）
(2) 手取川七ケ用水土地改良区『手取川七ケ用水誌』1982年
(3) 高堀勝喜「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」（『石川県押野村史』1964年）
(4) 清水隆久『横江史』1961年
(5) 南久和『金沢市新保本町チカモリ遺跡一遺構編一』金沢市教育委員会他　1983年
(6) 高堀勝喜他『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会　1983年
(7) 高堀勝喜・金山顕光・吉岡康暢・浅香年木『加賀三浦遺跡の研究』石川県教育委員会他　1967年
(8) 宮本哲郎『金沢市寺中遺跡』金沢市教育委員会　1977年
(9) 吉岡康暢他『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会他　1983年
(10) 四柳嘉章「松任町宮永遺跡」（『北陸自動車道路関係埋蔵文化財調査概要報告書（Ⅰ）』　石川県教育委員会　1969年）
(11) 吉田淳『野々市町御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査概報』野々市町教育委員会　1982年のほか吉田氏の教示による。
(12) 吉岡康暢「周辺地域における古墳時代形成期の様相」（『遠藤元男博士還暦記念日本古代史論集』1970年）

Ⅲ　調査の概要

1　調査区の設定

調査実施にあたり、農道計画路線センターを北側（広域農道への取り付け部側）から10m ごとに区画し、各々１区、２区、３区……と呼称することにした。周辺の水田部分については、昭和57年度転作促進対策臨時県単圃場整備事業に係る埋蔵文化財の分布調査として、松任市教育委員会が事前調査を実施している(昭和57年７月)。この調査結果をもとに、今回の発掘調査の南端（13区）を設定することにした。

調査は昭和57年度(排水路部分)、昭和58年度（農道部分）の２ケ年にわたって実施した。

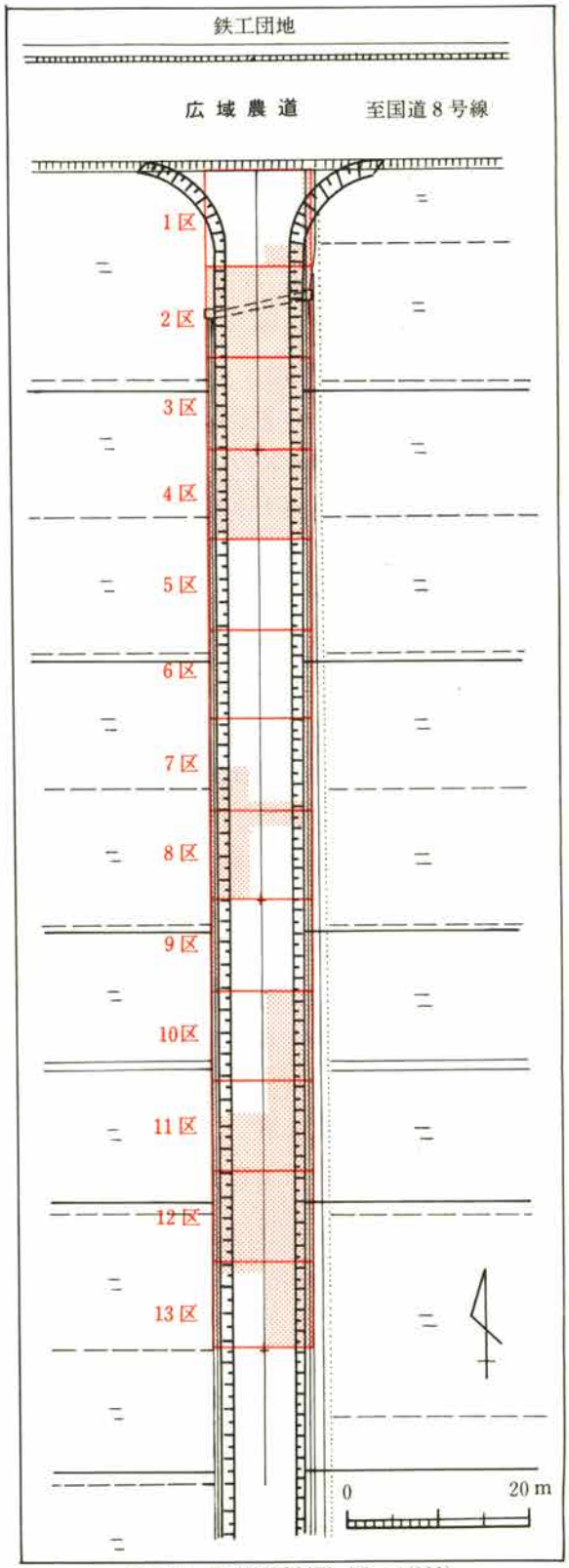
2　遺構密度と基本的層序

排水路部分の調査は、農道部分の遺構密度を把握するためにも、また基本的層序を確認するうえにおいても有益な資料を提示した。

遺構密度については北側に寄るほど濃く、逆に南にくだるにつれて希薄化する。これは松任市が実施した水田部分の分布調査結果を的確に裏付けている。

農道の両側に建設される排水路は、２区で西側排水が東側排水に合流、その間農道下を暗渠で渡る。そのため、２区の農道部分については次年度調査区との接続が繁雑となることが予測され、急遽57年度の調査対象区に含め対処することにした。

２区からは弥生中期の溝状遺構をはじめ、弥生後期の方形周溝状遺構など貴重な遺構・遺物が検出され、次年度の調査に期待が持たれた。



第４図　調査区区割図（S＝1/800）

しかし、57年度の調査終了後に実施された排水路建設工事に伴う重機の導入により、3区・4区の農道部分が攪乱されてしまったことは実に遺憾なことであった。当該区域には、2区から延びる弥生中期の溝状遺構をはじめ、本遺跡の主要遺構が集中していたと考えられるだけに残念でならない。これにより、58年度は遺構密度が希薄化する南側地区を中心に調査せざるをえなくなった。

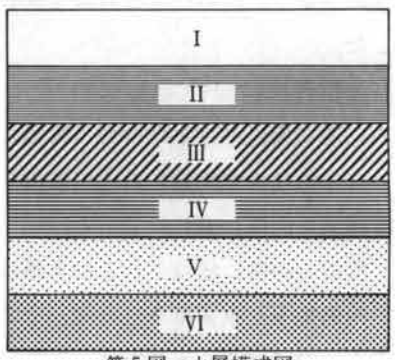
調査は、57年度の調査で遺構が確認されていた区域を中心に拡張し、実施した。検出された遺構では溝状遺構が最も多い。しかし、時期決定資料に乏しく、北側で検出した遺構群（1区・2区）との共存・併行関係等については明確にしえなかった。各区で検出した遺構および遺物の詳細については次章に譲る。

次に基本的層序についてであるが、調査区の総延長が130mにもおよぶことから、堆積する土層の層序にも随所に変換が認められる。これは周辺の水田が若干のレベル差を以って北側に傾斜することによるもので、過去の圃場整備の爪跡が看取される。

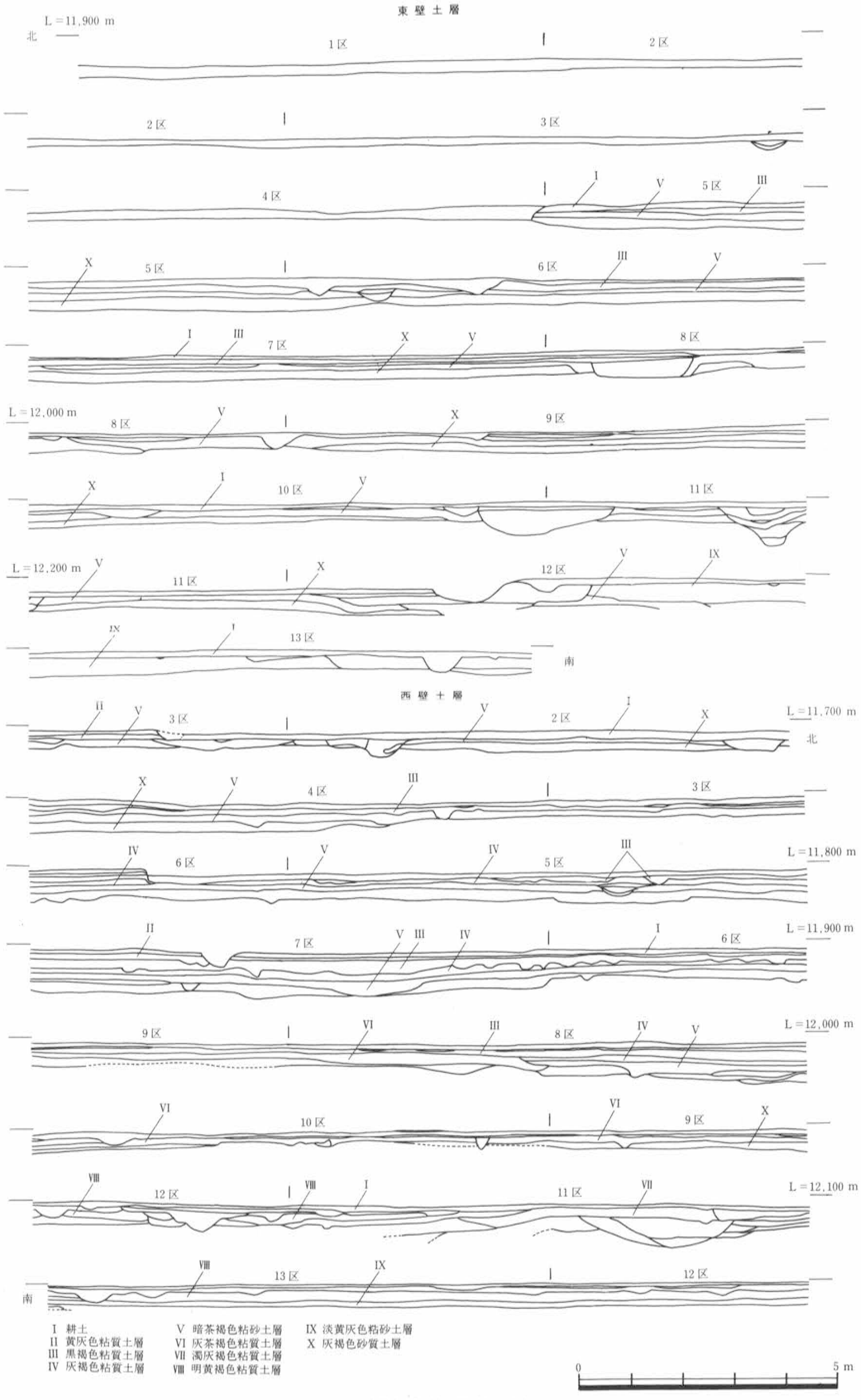
調査区東西両側壁の土層観察から確認できる遺物包含層（弥生時代後期～古墳時代前期）の広がりは、東側で5区から9区にかけて、西側では3区から9区にかけてである。東側の1区から4区にかけては旧排水路跡により包含層が掘削され、存在しない。また、西側2区については包含層が攪拌され、耕土化したことが考えられる。10区以南については東西壁共に包含層が削平された状態を呈している。ただ、東側でのみかろうじて該期の生活面と考えられる土層が残存する（10区～12区）。また、東側12区、西側11区以南で中・近世あるいは近代のものと考えられる落ち込み（旧河川跡か）が確認された。

以上のような状況から、調査区における基本的層序を若干復元的に推察し、以下のように把握した。

Ⅰ　耕土
Ⅱ　黄灰色粘質土層（床土）
Ⅲ　黒褐色粘質土層（遺物包含層）
Ⅳ　暗茶褐色粘砂土層（遺構検出面、生活面か）
Ⅴ　灰褐色砂質土層
Ⅵ　灰黄褐色砂質土層（地山）



第5図　土層模式図



第6図　調査区東西壁面実測図（S＝1/80）

Ⅳ　遺構と遺物

概況

調査区北端にあたる１区、２区では包含層が既に耕土化しており、耕土除去作業中に若干の遺物が検出されたにすぎない。幸いにも遺構にはさほど影響はなく、方形周溝状遺構をはじめとする溝状遺構、土坑、ピット等を検出することができた。ただ、前章でも若干ふれたように、３区、４区の農道部分に関しては、重機による攪乱深度が深く、検出遺構は皆無に等しい状況であった。５区以南については、遺構密度が急激に希薄化するという57年度調査の結果に基づき、要所を拡張する調査方法を採った。７区、８区および10区から13区の拡張区は、排水路部分の調査（57年度調査実施部分）で検出した遺構の延長部を確認するとともに、周辺の状況を把握するためのものである。その結果７区、８区では３条の溝状遺構と土坑１基、それに数個のピットを、また10区以南では土坑１基と２条の溝状遺構を検出した。出土遺物については、総数自体が少なく遺構に伴うものも僅かである。（浜野）

１　第１号方形周溝状遺構（第９図　スクリーントーンにより表示。図版２）

当該遺構は１号溝、２号溝、３号溝により形成される。

(1)　１号溝

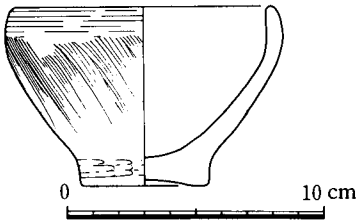
２区北西端で検出した東西方向に延びる溝である。西端は調査区外に及んでおり、未確認である。当溝は第１号方形周溝状遺構の北側を区画・規定するものであるが、対応する２号溝との平行関係には若干疑問が残る。検出部における測定数値は長さ1.8m、幅66cm、深さ23cm、溝内覆土層は黒褐色粘砂土の単一層である。溝内からの出土遺物はない。

(2)　２号溝

１号溝に対応し、方形周溝状遺構の南側を規定する溝である。平面プランは若干弧状を呈する。西端は１号溝同様、調査区外に及ぶために未確認である。また、検出部のほぼ中央部は南北に走る２条の近世溝によって切られる。２号溝の測定数値は長さ3.6m、幅68cm、深さ22cm。１号溝との距離は6.4m を測る溝内覆土層は１号溝と同じ黒褐色粘砂土の単一層である。溝底からは鉢形土器１点が出土している。

出土遺物（第７図、図版５）

口径10cm、底径５cm、器高7.2cm の鉢形土器で口縁部は若干内彎する。器壁は総じて厚手。底面中央は緩く凹む。調整は体部外面が斜行するハケ。口縁部がヘラ状具による横ナデ。底部にはヘラミガキが施こされている。内面調整については摩滅が著しいために不明。胎土には多量の粗粒砂が含まれる。焼成は普通。外面一面に煤が付着する。



第７図　２号溝出土土器実測図（1/3）

(3)　３号溝

第１号方形周溝状遺構の東側を規定する南北に延びる

溝で、北端は近世溝によって切られる。南端は2号溝と近接してはいるが、両溝共に明確な立ち上がりを以って終結しており接続することはない。3号溝の測定数値は長さ4.3m、幅67cm、深さ18.0cm。溝内覆土層は1、2号溝同様黒褐色粘砂土の単一層。溝内からの出土遺物はない。

（浜野）

2　第2号方形周溝状遺構（第9図　スクリーントーンにより表示。図版2・4）

当該遺構は4号溝、5号溝、7号溝により形成される。

(1)　4号溝

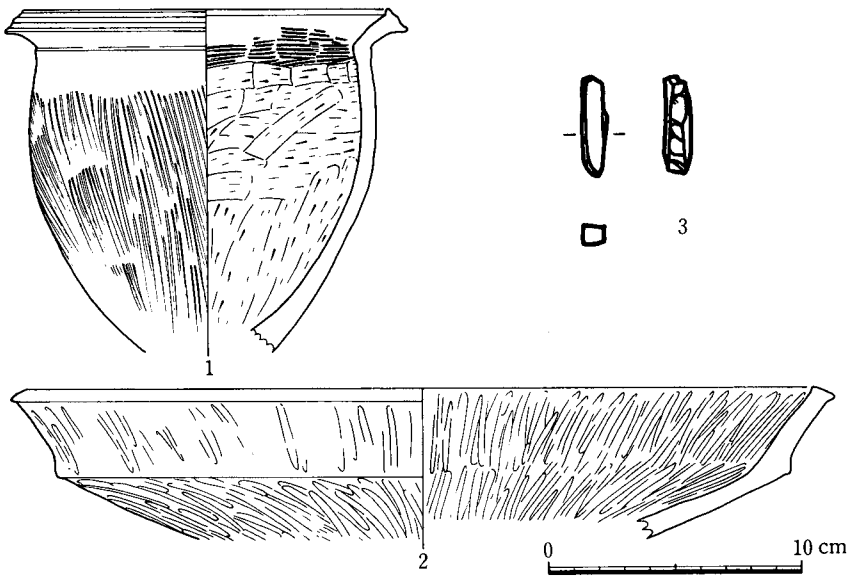
2区南東端で検出。溝の延長部分が調査区外に及ぶことから全姿を確認することはできなかったが、溝の方向および溝内覆土層の検討から、当溝が第2号方形周溝状遺構の南側を区画・規定する溝で、かつ、検出部分はその西端にあたるものと判断した。検出部における測定数値は長さ1.2m、幅80cm、深さ15.5cm。溝内からの出土遺物はない。

(2)　5号溝

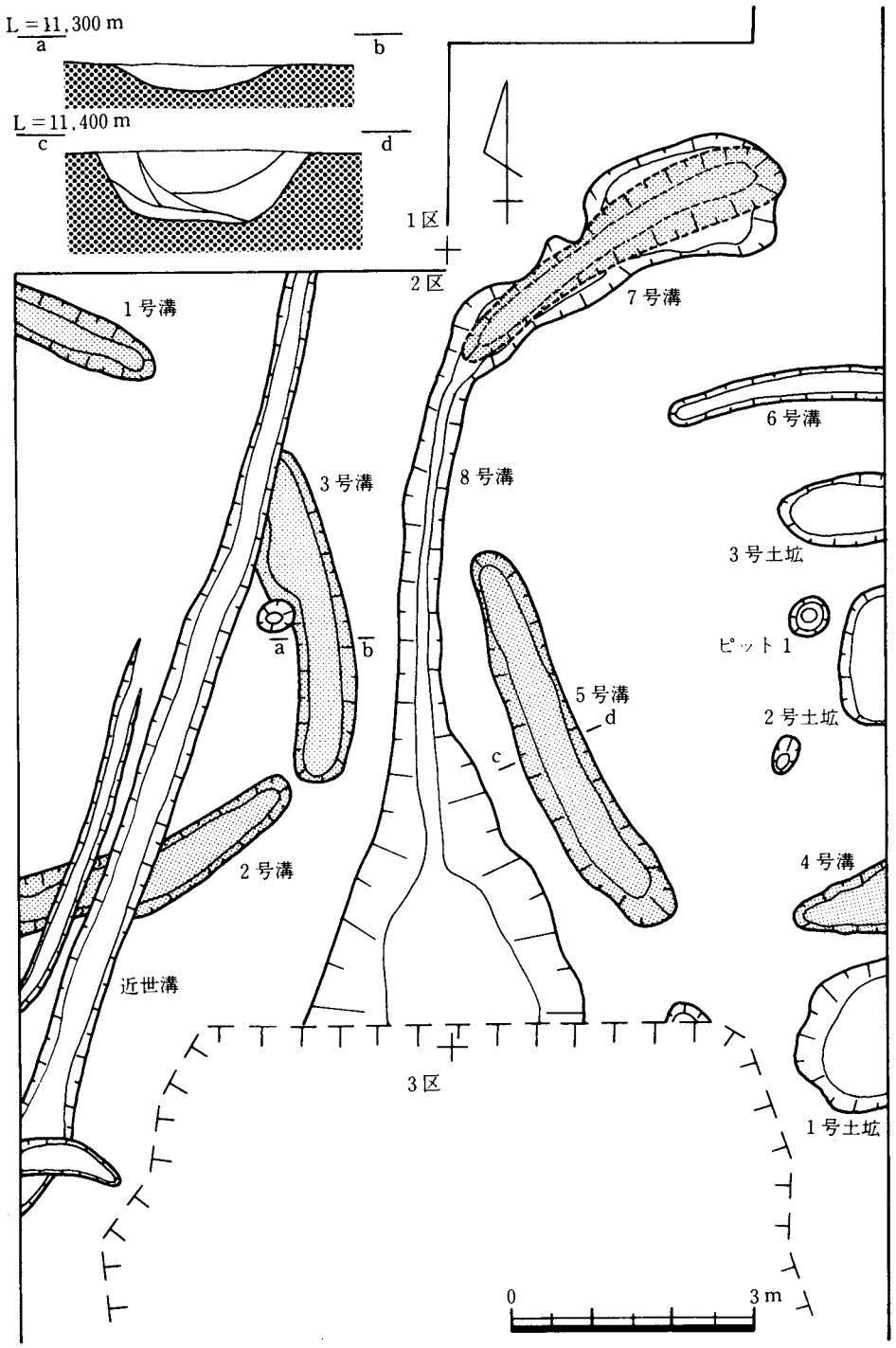
第2号方形周溝状遺構の西側を規定する、南東から北西方向に延びる溝である。他遺構との重複はない。平面プランは緩い弧状を呈する。5号溝の測定数値は長さ5.2m、幅82cm、深さ22cm。溝内覆土層は溝底から濁黄灰色砂、暗灰褐色砂、黒褐色粘砂の各層がほぼレンズ状に堆積する。覆土上層にあたる黒褐色粘砂土層中からは、底部を欠損する甕形土器と高坏形土器の坏部破片、それに管玉研摩未成品が出土している。

出土遺物（第8図、図版5・7）

1は口径14.4cm、残存高13.6cm、底部を欠損する甕形土器である。胴部の張りは弱く、最大径は中位で14.0cmを測る。口縁部はくの字状に大きく外反する。端部には幅広の口縁帯が形成さ



第8図　5号溝出土土器（1/3）・管玉（1/1）実測図



第9図　1区・2区・3区遺構配置図（S＝1/80）・断面図（S＝1/30）

れ、２条の浅い凹線が施される。調整は外面胴部以下がハケの後ナデ。肩部および頸部・口縁帯にかけてはナデ。体部内面はヘラケズリ。内面頸部屈曲部にはハケが施されている。器壁は厚手であるが、胎土・焼成は共に良好である。２は口径32.6cmの高坏坏部片である。１の甕形土器に近接し、坏部外面を上に向けて出土した。出土層および出土レベルからみても１の甕形土器に共伴するものであることはほぼ間違いない。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部で平坦面を形成する。端部平坦面の中央には浅い１条の凹線が巡る。調整は内外面共に丁寧なヘラミガキ。器壁は厚いが胎土・焼成は共に良好。坏部内面および口縁端部には赤彩痕が認められる。３は長さ1.3cmを測る四角状の管玉研摩未成品である。石質は濃緑色で堅緻な緑色凝灰岩。一面には平坦面を得るための押圧剥離が施されている。

(3)　７号溝

４号溝に対応し、第２号方形周溝状遺構の北側を規定する溝である。当溝は８号溝の覆土を切って造成されており、その重複部において明確な平面プランを検出することはできなかった。しかし、覆土層の断面観察の結果、７号溝の断面プランが確認されたため、その上法をつなぎ平面プランを推定した。その結果を基に７号溝の規模を測定すると、長さ4.6m、幅50.1cm、深さ16.0cmとなる。幅および深さが隣接する５号溝に比べ狭く、浅いのは、７号溝の検出地点が削平により５号溝の検出レベルより20cm～30cmも低いためである。溝内覆土層は灰褐色粘砂、黒褐色粘砂の２層で、レンズ状に堆積する。溝内からは若干の土器片が出土したが図化し得るものはない。

（浜野）

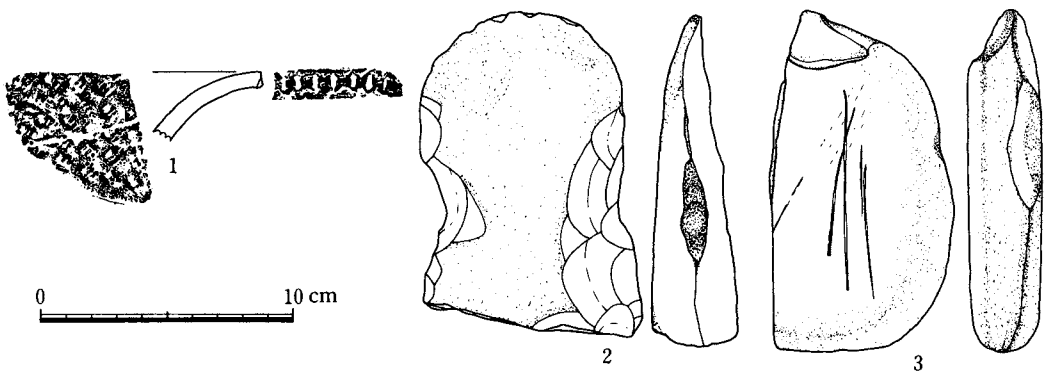
３　溝

(1)　６号溝（第９図、図版２）

第２号方形周溝状遺構内で検出した東西に延びる溝で、東端は調査区外に及ぶ。検出部における測定数値は長さ2.6m、幅42cm、深さ11.6cm。溝内覆土層は暗灰褐色粘砂の単一層。溝内からの出土遺物はない。

(2)　８号溝（第９図、図版４）

１区南東端から南西行し、やや彎曲して２区の中央を南行する溝である。溝の南北両端は、土



第10図　８号溝出土遺物実測図（1/3）

坑状の広がりをみせ、北端で7号溝と重複する。3区以南への当溝の延びは、重機による攪乱のため不明。検出部における8号溝の規模は、長さ13m、幅46cm～360cm(最小～最大)。深さについては、溝の検出レベルが南北で異なるため一様にはできないが、標高にして南端の溝底と北端の溝底では48cm北端が低い。溝内覆土層は南北で若干の違いをみせる。南端は茶褐色砂、黒褐色砂の2層がレンズ状に堆積するのに対し、北端では濁黄灰色の砂層が溝底に堆積、その上部に前記2層が堆積する。溝内からは弥生中期の壺形土器の口縁部片1点と石器2点が出土した。

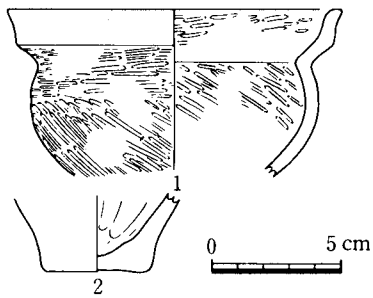
出土遺物（第10図、図版5・7）

1は弥生中期小松式土器の範疇でとらえられる壺形土器の口縁片である。外反する口縁の端部は面取りされ、下半にはヘラ状具による刻み目が施される。調整は内外面共にハケ。口縁部内面には櫛歯状工具による斜行短線文が施される。胎土は精選され、焼成は良好。

2は、いわゆる揆形を呈するとみられる打製石斧で、刃部を欠損する。片面に自然面を残し、側縁には調整打痕を留める。現存重量438gを計り、石質は角礫凝灰岩である。3は、両面に使用痕が認められる砥石であるが、片側が欠損して全体の形を知ることはできない。使用面の顕著な方には細い条線が数条認められる。特に、中央を走る1本の条痕は鋭い研ぎ痕が残されている。現存重量328gを計り、石質は凝灰岩質である。（浜野）

(3) 9号溝（第12図）

8区に検出された南から北西方向にのびる溝である。上端幅約50cm、深さ約20cmを測り断面形がU字状を呈する。南端の屈曲部では10号溝に先行する切り合いを示している。検出部分がわずかなため溝底面のレベル差は明確にできないが、地形の傾斜にそった西方向への流路が考えられる。溝中の覆土は、上層の黒褐色土と下層の灰褐色土からなり、両層に炭化物の混入が認められた。下層中より若干の弥生土器片が出土している。



第11図　9号溝出土土器実測図（1/3）

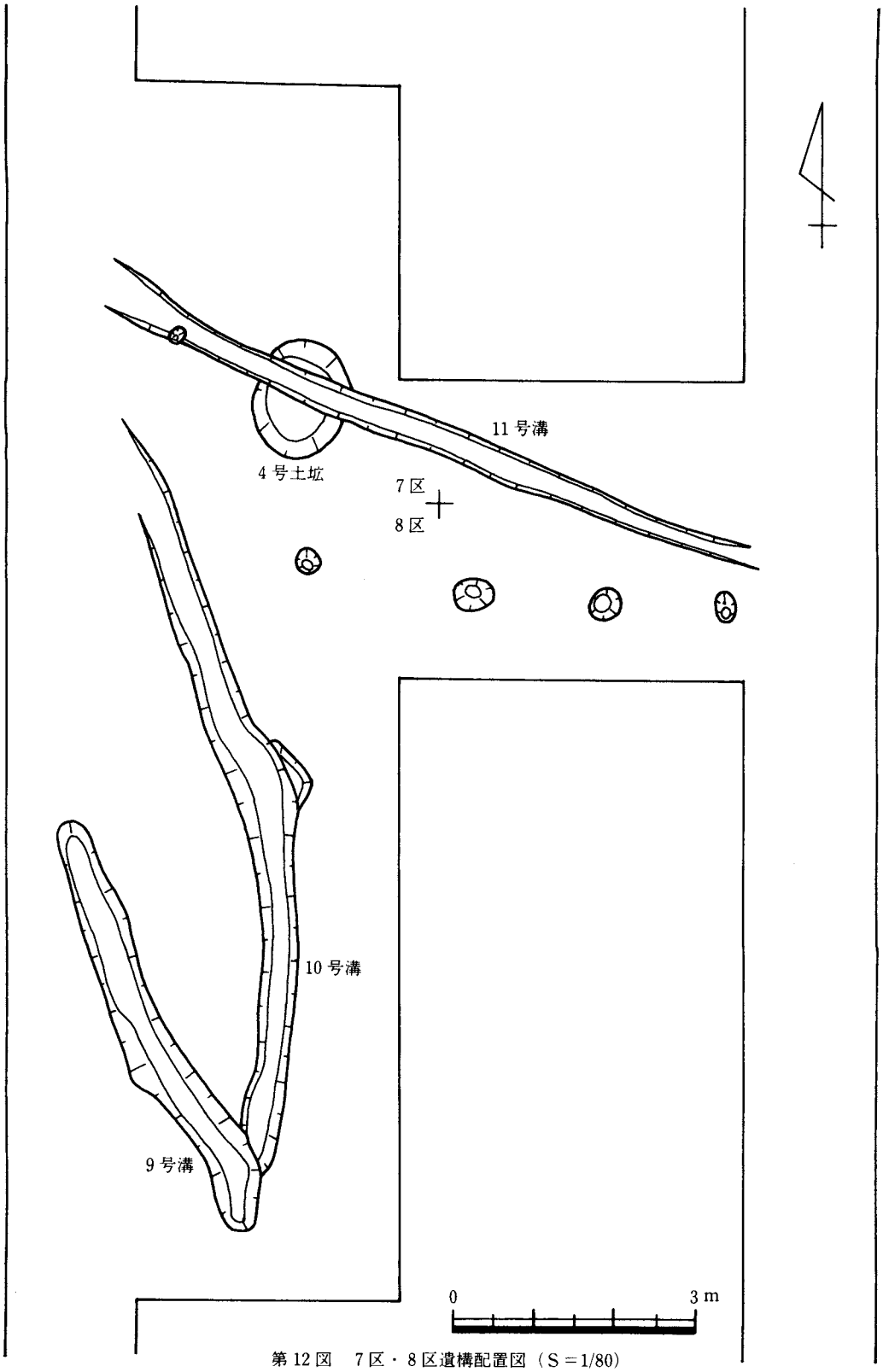
出土遺物（第11図）

1は有段口縁の鉢形土器である。復元口径13.1cmを測り、内彎する胴部に、頸部で強く外展してやや直立気味に立ち上がる口縁を有する。内外面ともにヘラ磨きが施されている。金沢市塚崎遺跡6号竪穴に類例をみるが、身の深さに対する口縁部の外上方への広がりが顕著でなく、それよりも古相を帯びているといえよう。2は底径4cmを測る底部片である。底面はわずかにくぼみ、直線的に立ちあがったのち外反するものである。

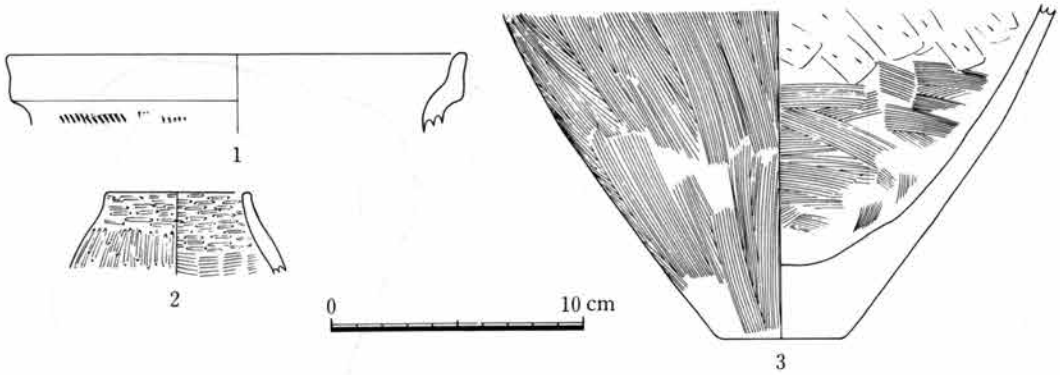
(4) 10号溝（第12図）

9号溝に先行してつくられたと考えられる上端幅40～65cm、深さ10cm前後を測る溝である。西から緩いカーブをえがいて北西方向へ折れる流路は、一見円形周溝状遺構のようにもみえる。しかし、北西方向にいくにしたがい溝底面が浅くなり、地形の傾斜にそって次第に解消されていくことも予想されるのでその可能性は薄い。溝中の覆土は、灰褐色を呈する単一層であった。

(5) 11号溝（第12図）



第 12 図　7 区・8 区遺構配置図（S＝1/80）



第13図　11号溝出土土器実測図（1/3）

7区に検出された東西溝である。上端幅約40cm、深さ約10cmで断面形がU字状を呈する。4号土坑を切り東西に直線的に走る。溝底は地形の傾斜にそって西側で低くなり、東から西への流路が想定される。溝中の覆土は、黒褐色を呈する単一層で、西端部分で土器の出土があった。

出土遺物（第13図、図版5）

1は有段の甕形土器の口縁部である。復元口径18cmを測る。直立気味の口縁部は、内外面ともに横ナデされ、頸部外面にはハケ調整が認められる。2は復元口径5.6cmを測る小型の壺形土器で、緩いカーブをなす胴部にやや直立気味の口縁部を有する。胴部内面にハケ調整が認められるが、その他はヘラ磨きである。3は底径4.8cm、内底からの厚さ2.9cmを測るやや大型の甕形土器の底部であろう。胴部外面と内底付近はハケ調整され、胴部内面はヘラ削りである。1・2は、塚崎II式（古）併行期の所産であろう。

(6)　12号溝（第14図）

11区に検出された上端幅約1.7m、深さ0.5mを測る二段掘りの溝である。北東から南西への流路をもち、南西部の地形の落ち込みで解消されている。溝中の覆土は、下から黒色粘質土、灰色砂層、黒灰色弱粘質土が堆積し、下部二層が水平に近い堆積を示しており水の流れがあったことを示している。溝底面は大部分が黄色砂質土上であるが、深いところは礫層にまでおよぶ。

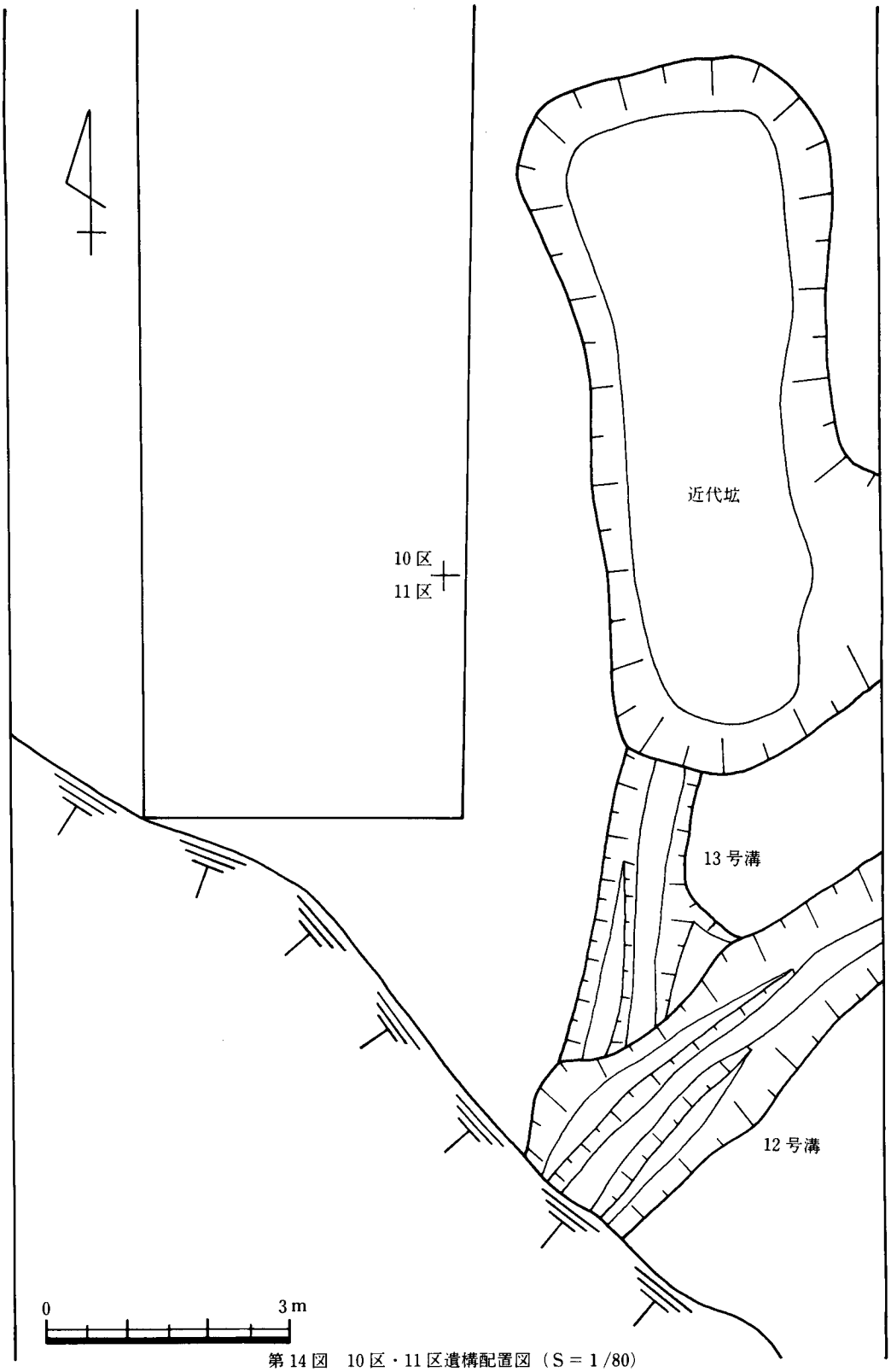
(7)　13号溝（第14図）

上端幅約1m、深さ約30cmを測る南北溝である。地形の傾斜にそって北から南への流路をもつ。北は近代の大型土坑によって切られ、南は12号溝に切られて地形の落ち込みで解消される。断面型は、北側でU字状を呈するが、南側は二段掘りとなっている。二段掘りは、二次的な掘り直しによるものとも考えられるが、土層ではその痕跡は認められなかった。（戸淵）

4　土坑

(1)　1号土坑（第9図）

4号溝の南側に隣接する土坑である。土坑の東端が調査区外に及ぶため全形は不明。ただ、検出部の形状からは、不整円形を呈することが想定される。検出部における測定数値は、南北186cm、東西（遺構西端から調査区東壁まで）117cm、深さ15.6cm。土坑内覆土層は底から濁黄灰色



第14図　10区・11区遺構配置図（S＝1/80）

砂、黒褐色粘砂の2層がレンズ状に堆積。下層から条痕調整が施された粗製土器片1点が出土した。

出土遺物（第15図）

径不明の粗製甕形土器口縁片である。内外面共に斜方向の条痕調整が施される。色調は内面淡黄茶褐色、外面暗灰褐色。胎土には多量の粗粒砂が含まれるが焼成は良好。

第15図　1号土坑出土遺物拓影（1/2）

(2)　2号土坑（第9図）

2区、第2号方形周溝状遺構の区画内で検出した土坑である。1号土坑同様東側が調査区外に及ぶために全形は不明。検出部における測定数値は南北170cm、東西58cm、深さ13.8cm。土坑内覆土層は濁黄灰色砂の単一層。土坑内からの出土遺物はない。

(3)　3号土坑（第9図）

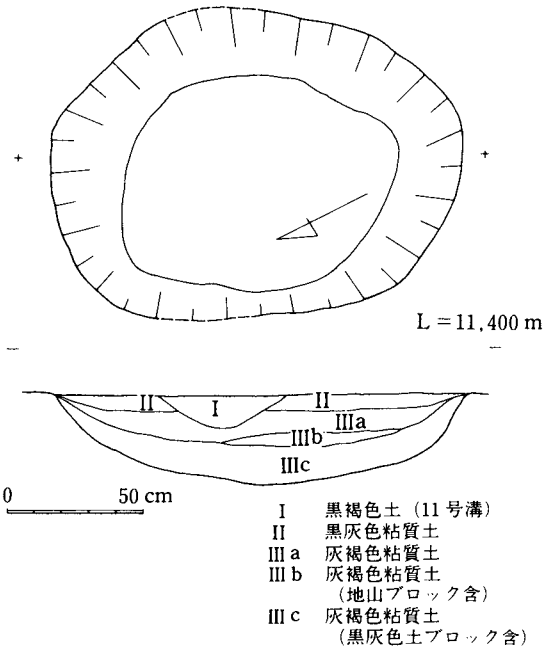
2号土坑の北側に隣接する土坑で、1、2号土坑同様東端は未確認である。検出部における測定数値は南北92cm、東西130cm、深さ15cm。土坑内覆土層は濁黄灰色砂の単一層。土坑内出土遺物はない。

（浜野）

(4)　4号土坑（第12・16図）

7区に検出された楕円形を呈する土坑で、長軸径1.5m、短軸径1.3m、中心部での深さ0.32mを測る。断面形は、肩部から坑底中心部に向かって緩やかに傾斜する鈍いU字状を呈する。土坑内の覆土は、下から灰褐色、黒灰色粘質土が堆積し、灰褐色土は地山ブロックおよび黒灰色土ブロックの有無によって三層に分層される。特に第16図に示したIIIb層には地山ブロックの混入が著しく、本土坑が人為的に埋められた可能性を示している。覆土上面には、黒褐色土を覆土とする11号溝との切り合いが観察でき、本土坑が11号溝に先行する時期であることを示している。出土遺物には弥生土器の小片があるが図示できるものではない。

（戸淵）



第16図　4号土坑実測図

5　その他の遺構

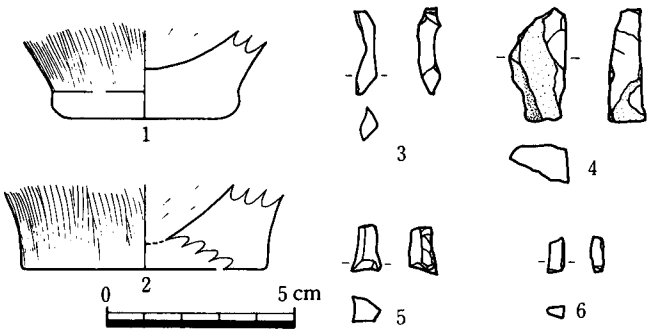
(1)　2区検出ピット1（第9図）

2区では4箇のピットを検出した。その中で遺物が伴うのは2号土坑と3号土坑に近接するピット1のみである。当ピットは径50cmの円形プランを呈する二段掘りのピットで、他のピットとは様相を異にする。深さ21.7cm。覆土層は灰褐色粘砂、黒褐色粘質の二層。覆土層からは土器

底部片２点と４点の緑色凝灰岩片が出土した。

出土遺物（第17図、図版７）

１、２は共に甕あるいは壺の底部片である。１は底径4.4cm、２は底径6.4cm。共に外面調整はハケ、内面調整はヘラケズリである。３～６は全て淡緑色で硬質の緑色凝灰岩片である。３は断面三角形の薄い剝片で、この状態からの管玉製作は難しいと思われる。４は原石分割工程の段階でできた剝片で、もろい岩石が付着している。５はまだ均整のとれていない形割未成品。一部に押圧剝離が見られる。６はやや均整のとれた形割未成品。５、６の長さはそれぞれ、1.2cm、0.98cm を測る。（藤田）

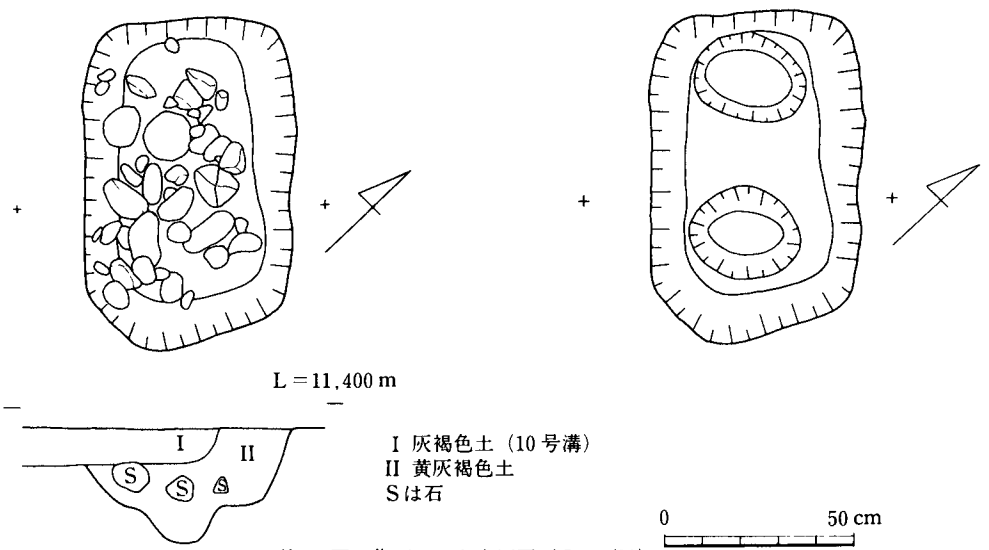


第 17 図　ピット１出土遺物実測図（1/2）

(2)　集石ピット（第18図、図版３・４）

８区に検出された不整形な長方形を呈するピットである。上端長辺約85cm、同短辺約50cm を測り、一部が10号溝によって切られている。検出面より約10cm 下で、５cm ないし10cm 大の河原石が集石されている。集石を取り除くと、底面には径約20cm 前後で深さ15～20cm 程の円形を呈するピットが二個配されている。覆土は、黄灰褐色土を呈する単一層であり、土器片の出土は認められなかった。松任市宮永遺跡では、[註1]配石遺構と呼ばれるものの中に、土器を配し、その下にピットをうがち河原石を詰めこんだ遺構が知られており、本例はそれに類するものといえる。

（戸澗）



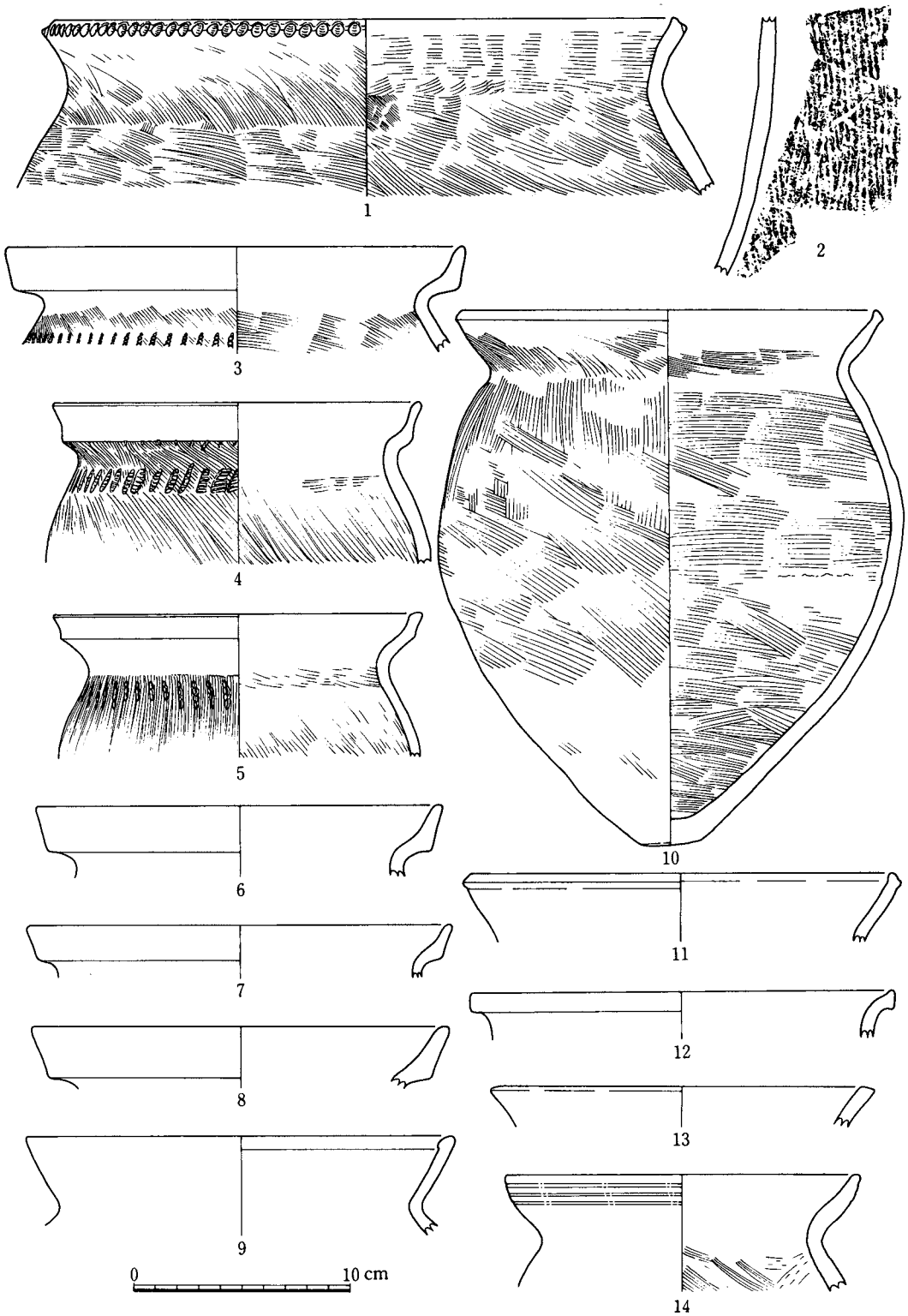
第 18 図　集石ピット実測図（S＝1/20）

6　包含層の遺物（第19・20・21図、図版5・6・7）

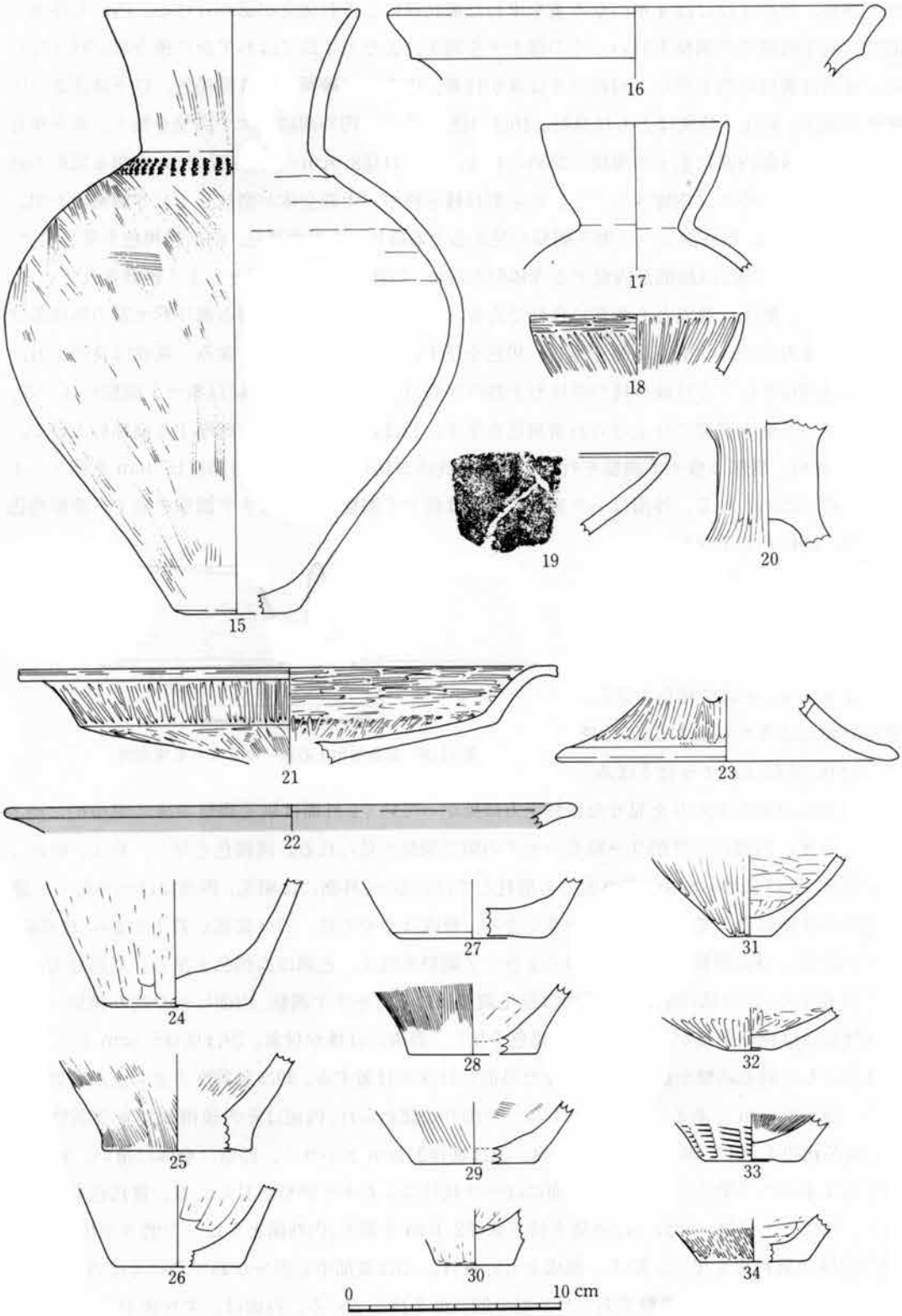
この節には遺構（溝、土坑、ピット）以外の場所（落ち込み等含む）から出土した遺物を一括して取り上げた。遺物は細片が多く、復元なった物もかなりの数の土器片を接合させている。また包含層の遺物は広範囲に拡がっているが、この節で取り上げた遺物の70%余りは、6～9区より出土している。記述はおおまかに甕、壺、高坏、底部という順序をとった。

1は口径28.6cm、残存高8.2cmの甕形土器である。口頸部は〝く〟の字形にゆるく外傾する。口縁部外面は刷毛調整後にナデ調整、頸部以下は刷毛調整、口縁端部には刷毛状具で刻目文を施す。内面は全体に刷毛調整がはいる。色調は黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。2は外面に条痕文、内面にヘラ削り調整を施す器形不明の土器破片。1mm前後の砂粒を多く含み外面褐色、内面茶褐色（部分黄褐色）を呈す。3～8は有段口縁を持つ甕形土器。3は口径21.0cm。肩部に刷毛状具による刺突文を廻らし、口縁部は内外面とも横ナデ調整がはいる。4はやや外反する口縁を持ち口径16.8cm、残存高7.5cmを測る。口縁部下端にはヘラ状具による刻目文を、頸部には刷毛状具による右方向への刺突文を施す。内外面とも口縁部は横ナデ、頸部以下は刷毛調整が認められる。煤の付着があり、胎土、焼成とも良好。5は幅の狭い口縁を持つ。口径16.9cm、残存高6.7cm。頸部には櫛状具による刺突文が見え、器表には煤の付着が著しい。胎土は若干の砂粒を含み、焼成は良好。6～8は口縁部内外面に横ナデ調整を施す甕形土器片。6は口径18.7cm。黄灰褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。7はやや狭い口縁を持ち口径19.4cm。橙黄褐色を呈し、焼成はやや不良。8は口径19.2cm。外面黄褐色、内面淡褐色を呈し、胎土、焼成は良好。9は〝く〟の字形口縁を持つ甕形土器の口縁部片で口径19.8cmを測る。やや内彎気味の口縁部は口唇で肥厚し、内外面とも横ナデ調整を施す。色調は黄灰褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好。10は出土遺物中、全体の形を窺うことができる数少い好品である。口径19.0cm、最大胴径21.5cm、底径3.1cm、器高24.9cmを測る。口縁部内外面は横ナデ調整を施すが一部刷毛が残り、同じく横ナデ調整が見える口縁端部をわずかにつまみ出している。外面上半部は縦、斜方向への刷毛調整、下半部はナデ調整を施し、一部刷毛を残す。内面は全体に横（一部斜）方向の刷毛調整が入れられ、体部中央にわずかに接合痕が認められる。胎土、焼成とも良く、色調は灰褐色を呈し内外面に黒斑がはいる。11は口径19.2cm。内外面に横ナデ調整を施す。口縁端部は横ナデ調整し10と同様わずかにつまみ出している。12は口径19.4cm。口縁端部は横ナデ調整の面を持つ。内面は磨滅。橙灰褐色を呈し、焼成はやや不良。13は口径17.6cm。口縁端部は平坦面をつくり、角張った形となる。黄灰褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。14は〝く〟の字形でゆるく内彎する口縁を持つ甕形土器。口径16.3cm、残存高5.5cmを測る。口縁部外面は横ナデ調整後、ゆるい擬凹線を三条廻らす。内面頸部以下はヘラ削り後刷毛調整を施す。器表には煤が付着し、灰褐色を呈す。1mm前後の砂粒を含み、焼成は良好。

15は口径11.8cm、最大胴径21.6cm、底径4.6cm、器高28.5cmを測る壺形土器である。胴部と頸部の接合部は一部図上復元を行った。頸部は斜上方に立ち上がり、ゆるやかに外反する。外面全体は細かい刷毛状具で丁寧にナデ状の調整を施している。口縁部、頸部付け根部分はその後横



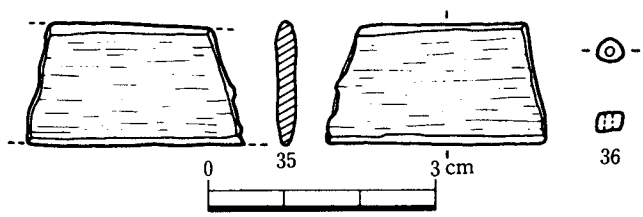
第19図　包含層出土土器実測図(1)（1/3）



第 20 図　包含層出土土器実測図(2)（1/3）

ナデ調整、頸部下位には4本の草本茎を束ねた櫛状具による刺突文が認められる。内面も外面と同様の刷毛状具での調整を行い、その後ナデを施す。また上半部にはわずかに接合痕が残っている。外面は黄橙褐色を呈し、肩部以下は煤が付着。内面は口縁頸部が黄橙褐色、以下底部まで灰褐色を呈す。胎土、焼成はともに良好。16は口径22.5cm。内外面に横ナデ調整を施す。黄灰褐色を呈し、口縁部内面に若干の黒斑が認められる。17は口径8.6cm、残存高7.2cmを測る瓢形の壺形土器か。ゆるやかに内彎する〝く〟の字形口縁を持つ。土器全体が磨耗しており調整は不明。18は口径9.8cm。内外面にヘラ磨き調整が見える土器破片。外面黄褐色、内面黒褐色を呈し胎土、焼成とも良好。19は口縁部が内彎する浅鉢形土器か。口径不明。内外面ともよく研磨されている。褐色を呈し、胎土、焼成とも非常に良好である。20は残存高6.0cmを測る高坏形土器の脚柱部分である。縦方向のヘラ磨き調整を施し、褐色を呈す。砂粒を比較的多く含み、焼成は良好。21は口径25.1cm。外反する口縁を持つ高坏形土器の坏部。口縁上部及び端部には横ナデ調整がはいる。内外面はヘラ磨き調整で仕上げられ黄褐色を呈す。22は口縁端部内面が肥厚する高坏形土器か。口径26.6cm。端部は横ナデ調整を行い、赤彩の痕跡が見られる。23は台部径15.4cmを測り、1つの穿孔が認められる。外面はヘラ磨き、端部は横ナデ調整、内面はナデ調整を施す。黄橙褐色を呈し、砂粒を若干含む。

24～34は甕及び壺の底部である。24は底形6.0cm、残存高6.0cm。外面は縦方向のヘラ削り、内面はナデ調整を施す。平底で褐色を呈し、底部外面には煤が付着する。25は底径7.0cm。底部はわずかにくぼみ、若干直立した立ち上がりを見せた後斜上方に拡がっていく。外面は刷毛調整の後、部分的に磨き調整を施す。内面はヘラ削り→刷毛→ナデの順で調整が見られる。淡褐色を呈し、胎土、焼成はやや不良。26は底形5.8cm。内外面とも磨耗してはいるが、外面には刷毛、内面にはヘラ削りの調整痕がわずかに残っている。砂粒を多く含み、焼成はやや不良。27は底部が若干くぼみ、底径6.8cmを測る。外面磨耗、内面は指頭によるナデ調整を施す。色調は淡褐色を呈し、底部外面には煤が付着する。28は底径6.0cm。外面は刷毛調整後に下方をナデ調整、内面はヘラ削り調整、また底部外面には刷毛調整が見られる。黄褐色を呈し、器表には煤が付着。29は底径5.6cmを測り、内外面ともに刷毛調整が認められる。また外面には煤が付着する。30は急角度で立ち上がる底部を持ち、径は3.6cmを測る。内外面ともにヘラ削りが認められ、内面はその後指頭でナデ調整を施す。暗茶褐色を呈し、胎土、焼成は不良。31は底径2.1cmと小さく、器壁は全体に薄い。外、底面とも丁寧にヘラ磨きが施され、内面にはヘラ状具によるナデ調整が見られる。黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。32はくぼみ底を持ち底径2.1cmを測る。内外面ともにヘラ磨きが施される。31と同様に黄褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好。33は底部中心部分がわずかにくぼみ底径4.5cmを測る。外面は刷毛調整であろうが部分的に面を持っている。内面は、すり鉢状に刷毛調整がはいり、底部外面はナデ調整を施す。34は底径5.0cm。外面はヘラ磨き調整、赤褐色を呈し、内



第21図　包含層出土石鋸・ガラス小玉実測図

面はヘラ削り後ナデ調整を施し、淡褐色を呈する。

35は第2区地山直上より出土した石器である。全形を知ることはできないが、玉類を細工する際に擦切具として使用された石鋸と推測される。石鋸による擦切施溝は弥生時代の管玉製作にしばしば見られ、羽咋市吉崎・次場遺跡[註2]、七尾市細口源田山遺跡[註3]出土遺物の中にも施溝未成品が検出されている。当遺跡出土の石鋸は灰褐色を呈し、長さ2.9cm、幅1.6cm、厚さ0.25cmを測る。刃部断面はU字形をなし、石質は紅簾石片岩と思われる。紅簾石片岩は新潟県の姫川流域、愛知県などが原産地であるため、翡翠等とともに、地域交流の点でも多いに注目されている。なお県内では吉崎・次場、寺中[註4]、細口源田山の各遺跡で同種の遺物を確認している。36は第2区包含層上面より出土したガラス小玉であり、径3.4mm、厚さ2.7mm、孔の径1.2mmを測る。全体に半透明のコバルト・ブルーを呈し、不整楕円形をなす。（藤田）

註

(1) 四柳嘉章「松任町宮永遺跡」（『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査概要報告書（Ⅰ）』 石川県教育委員会 1969年）

(2) 寺村光晴『古代玉作の研究』吉川弘文館 1971年

(3) 桜井憲弘・田中政行・土肥富士夫他『細口源田山遺跡』七尾市教育委員会 1982年

(4) 宮本哲郎他『金沢市寺中遺跡』金沢市教育委員会 1977年

V まとめ

1 遺構について

横江A遺跡で検出した遺構から遺跡の性格を考える際に、最も留意しなければならないのは2区で検出した2基の方形周溝状遺構である。当遺構の名称は、「方形周溝墓と推定されるが断定しきれない不確定要素を多分に含む遺構」という意味で、それ自体が独自の性格を有するものと考えているわけではない。ただ、弥生時代の墓制の代名詞の一つとして使用される『方形周溝墓』も当県においては未だ不明な点が多く、県下での発掘例としては、七尾市細口源田山遺跡(註1)（弥生中期）と金沢市七ツ塚墳墓群(註2)（弥生後期後半）の2例を挙げるのみである。また両遺跡は時期は異なるものの、共に台地上で造営されたものであり、平野部、いわゆる低地での状況については、未だその様相さえも把握されていないのが実状である。そういう意味においても、横江A遺跡で検出した方形周溝状遺構は注意すべき遺構であると考えられよう。

そこで横江A遺跡で検出した当遺構が方形周溝墓と断定しきれない要素と、推定される根拠とを整理し、今後発見が予測される「低地での方形周溝墓」を考える一資料としたい。

まず、当遺構を方形周溝墓として断定しきれない要素の第1は、遺構を全掘していないという致命的な点にある。次に、方形区画の内側から埋葬施設が発見されなかったこと。また、遺構の重複や一部削平によるプランの変形が推測されること。以上が不確定要素を構成する主たる理由である。これに対し、当遺構が方形周溝墓と推定される根拠としては、各3条の溝がコの字形に廻り、方形区画を形成する。方形区画を構成する各3条の溝の底レベルがほぼ同一であり、かつ覆土層も酷似する。方形区画を構成する溝の内、5号溝からは供献されたと考えられる赤彩高坏坏部片と底部を打ち欠いた甕形土器、それに緑色凝灰岩管玉研摩未成品が出土している。また、2号溝からも鉢形土器が出土している点。それに当遺構が単独ではなく最低2基以上存在していることなどが挙げられる。

いずれにしろ県内の低地方形周溝墓を考えるにはいまだ類例が乏しく、今後の資料の増加を待つほかない。

2 遺物について

横江A遺跡の発掘調査区から出土した遺物量は、遺物箱にして5箱。うち遺構に伴うものはごく僅かである。時期的には弥生時代中期から古墳時代前期にかけてのものがその大半を占める。以下、遺構に伴う遺物を中心にその時期的様相を概観したい。

まず8号溝出土壺形土器口縁片および揆形打製石斧・砥石片（第10図）であるが、土器については北陸で櫛描文が隆盛する時期、いわゆる小松市八日市地方遺跡出土土器(註3)を指標とする弥生中期小松式土器の範疇でとらえられるものである。揆形打製石斧および砥石片についても、該期の代表的な遺跡である金沢市寺中遺跡(註4)や七尾市細口源田山遺跡等で類例が認められる。次に第1号方形周溝状遺構の南側を規定する2号溝出土鉢形土器（第7図）であるが、当溝からの出土遺物はこの鉢形土器1点のみであり、また、当溝と共に方形区画を構成する1号溝、3号溝からの出

土遺物も皆無であることなどから、断定は避けたい。ただ、第2号方形周溝状遺構の西側を規定する5号溝出土甕形土器および高坏形土器が弥生後期中葉頃の所産と考えられることから、当鉢形土器についても大差ない時期のものと考えておきたい。さて、弥生後期中葉頃の所産とした5号溝出土甕形土器および高坏形土器（第8図）についてであるが、従来北陸の弥生後期前半期の編年観を支えてきた加賀市猫橋式土器群中にその類例が認められる。(註5) ただ、近年の発掘調査により該期の資料が徐々にではあるが増加しており、今後はより良好な一括資料に基づいた編年作業が必要であると考えている。ともかく、5号溝出土甕形土器および高坏形土器の類例については、加賀市猫橋遺跡(註6)をはじめ、金沢市西念・南新保遺跡(註7)、羽咋市次場遺跡(註8)などで認められる。1号土坑出土条痕土器片（第14図）および包含層出土の条痕土器片（第19図2）については、時期を類推するのが困難であり不明とせざるをえない。9号溝出土鉢形土器口縁片（第11図）については、本文中においても若干ふれたが、弥生後期終末に近い時期、いわゆる塚崎I式あるいはII式の古相を呈する土器としてとらえておきたい。(註9)

以上、遺構に伴う遺物について概観したが、包含層出土遺物についてもほぼ同様な時期的ばらつきが認められる。

3 むすび

2次に渡る発掘調査の結果、横江A遺跡が弥生時代中期から古墳時代前期にかけての複合遺跡であることが判明した。また、検出した遺構により弥生後期中葉頃には当地域が墓域としての役割を担っていた可能性をも指摘することができた。今後は当遺跡で確認した事象がより多く参考資料として引用されることを願うと共に、引き続き当遺跡の検討を重ねてゆきたいと考えている。

註

(1) 桜井憲弘・田中政行・土肥富士夫他『細口源田山遺跡』七尾市教育委員会　1982年

(2) 『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書I』石川県教育委員会　1976年

(3) 橋本澄夫「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」（『石川考古学研究会々誌』第11号）石川考古学研究会　1968年

(4) 宮本哲郎他『金沢市寺中遺跡』金沢市教育委員会　1977年

(5)(6) 『北陸大谷高等学校地歴クラブ紀要第2号』北陸大谷高等学校他歴クラブ　1967年、筆者自身も出土遺物を実見する機会を得た。

(7) 宮本哲郎他『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会他　1983年

(8) 福島正実氏より教示

(9) 『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』石川県教育委員会　1976年

図版1　遺跡周辺の航空写真

図版2　第2区検出遺構

第　2　区　全　景

第2号方形周溝状遺構

図版3　第7区・8区検出遺構

第7区～8区　検出遺構全景

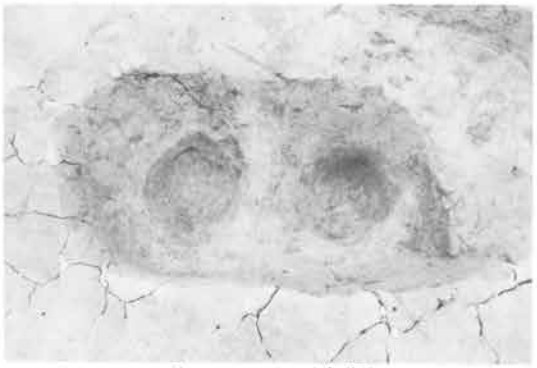
第8区集石ピット

図版4　検出遺構と遺物出土状況

8　号　溝

第3・4区

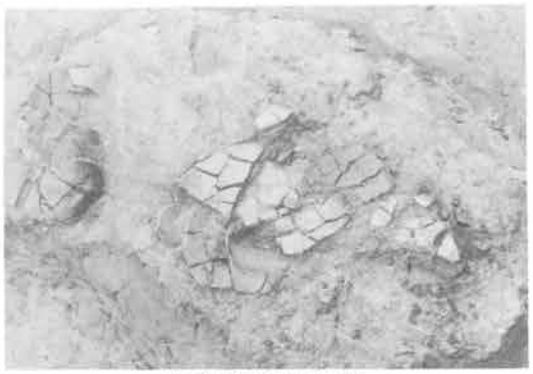
西壁調査風景



集石ピット（完掘）

5号溝高坏出土状況

5号溝甕出土状況

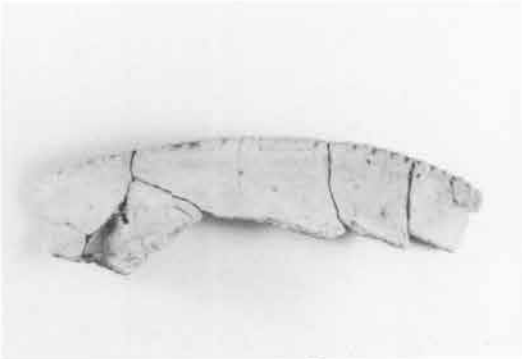


包含層壺出土状況

8号溝打製石斧出土状況

包含層

5号溝



包含層

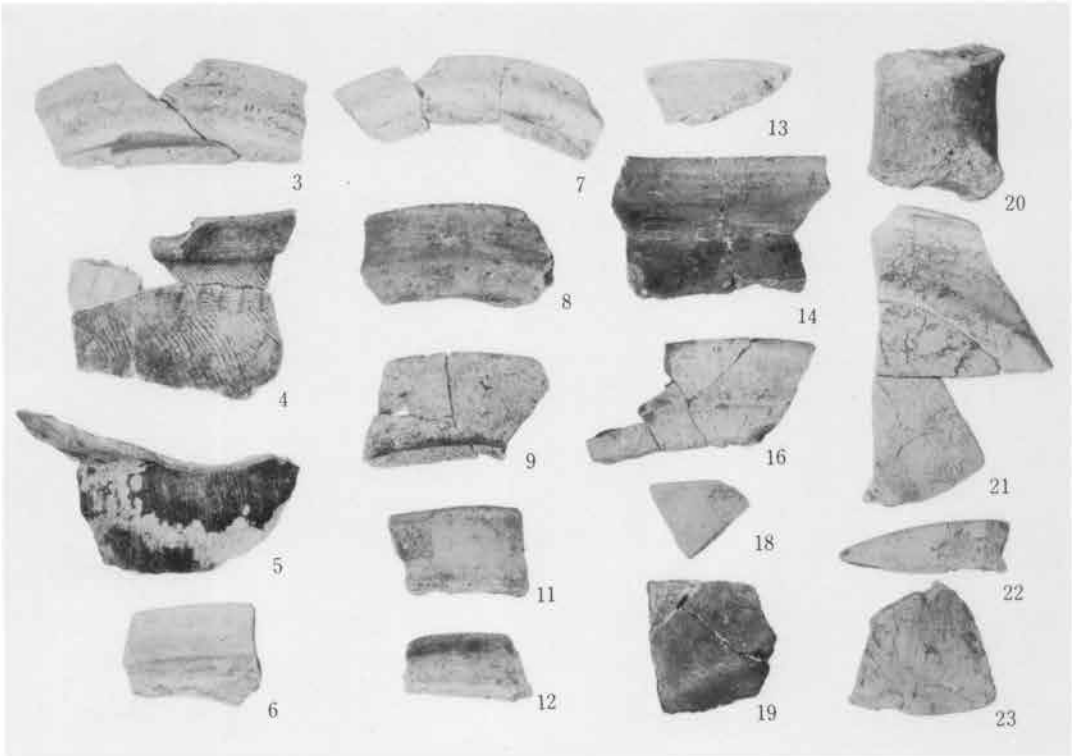
包含層

8号溝

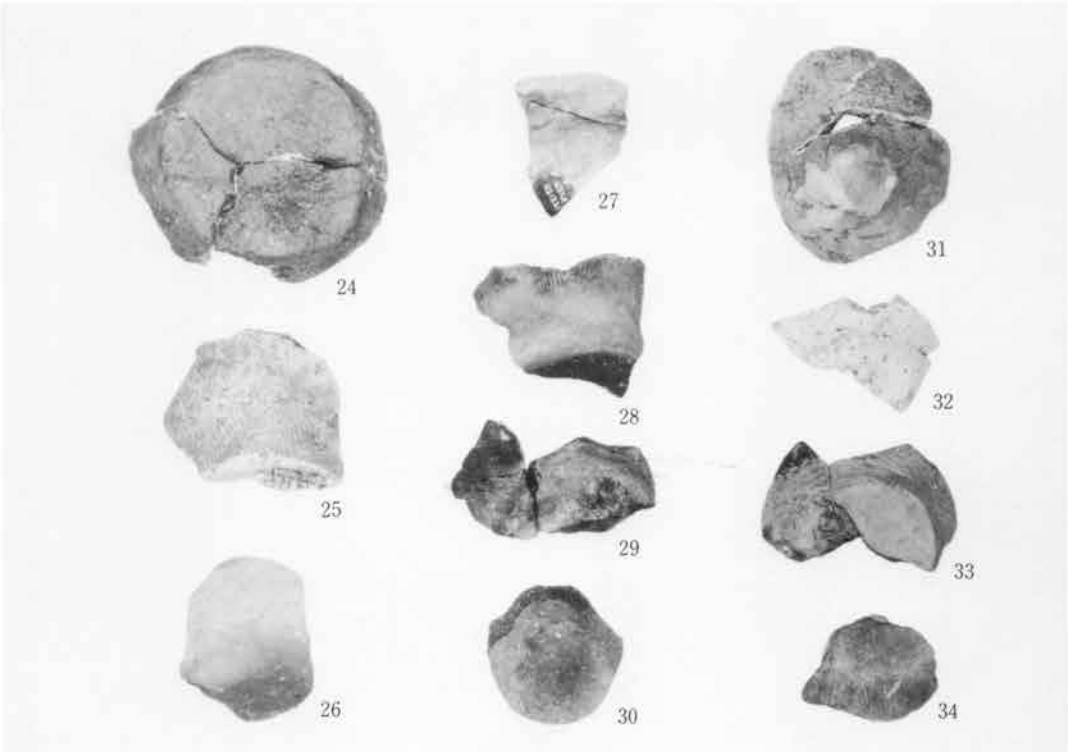
11号溝

2号溝

5号溝

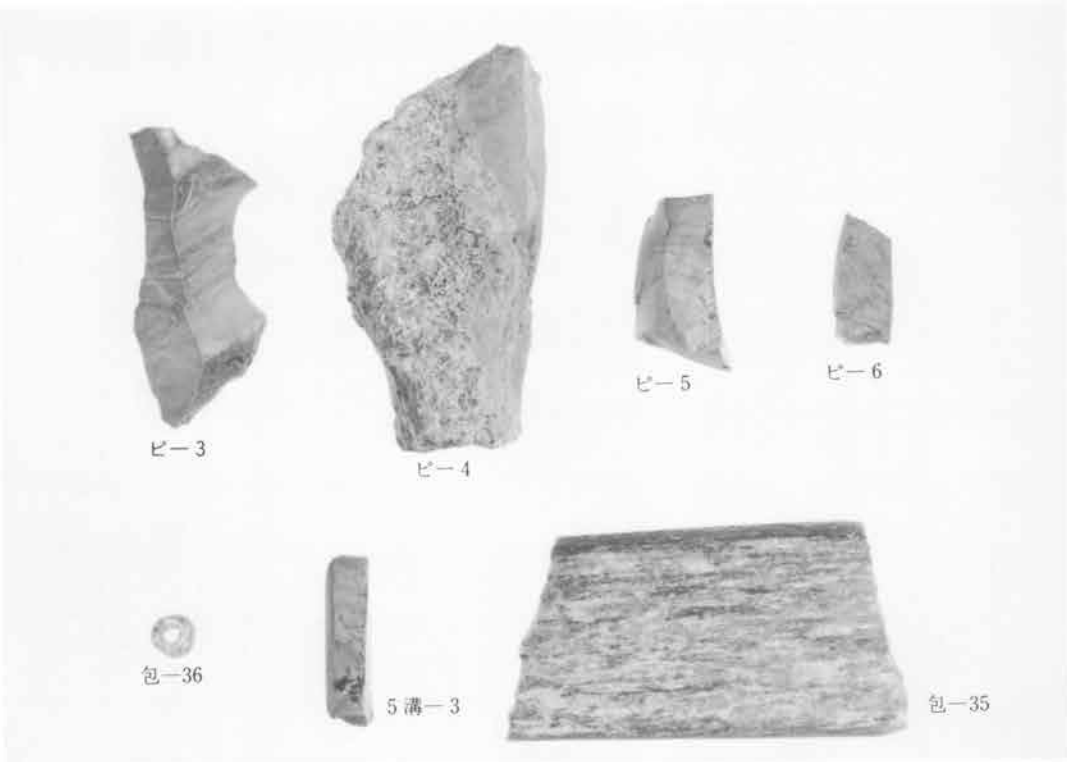


包含層出土土器



包含層出土土器

8号溝出土石器



ピット1・5号溝・包含層出土遺物

松任市横江A遺跡発掘調査報告書

昭和59年3月

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
電話（0762）43—7692番

印　　刷　株式会社　橋　本　確　文　堂
石川県金沢市増泉4丁目10番10号